

13
S-3

めぐりあひに序す

貴女方の中で姉さんを持たない人は影いさ思ひます。悲しい時には慰めてくれ、楽しい時には共に笑つてくれる。仲睦まじい姉妹程世に美しいものがありませうか。その楽しい睦ましい姉さんと一所に暮らす事が出来ず、別れて仕舞ればならぬ事になつたら、其慰みは何様でしやう。姉に代つて慰めて呉れべき答の父母は眞の父母で無いのですから、姉の外には自分を慰めて呉れる者は誰もありません。

朝に夕に門に倚つて雲の掛る山々を眺めては思ひやる計り、時には鳥の鳴く聲に姉を怒び、流るる水に昔を想つて、姉慕ふ心は彌々増して行く計り。人の聲音には姉が歸つたかと愕く夜もありませう。日は沈み、鳥は啼に歸つても自分の心を慰藉めてくれる、親鳥が雛を抱くやうに、抱いてくれる人はないので。これこそ悲しい境涯

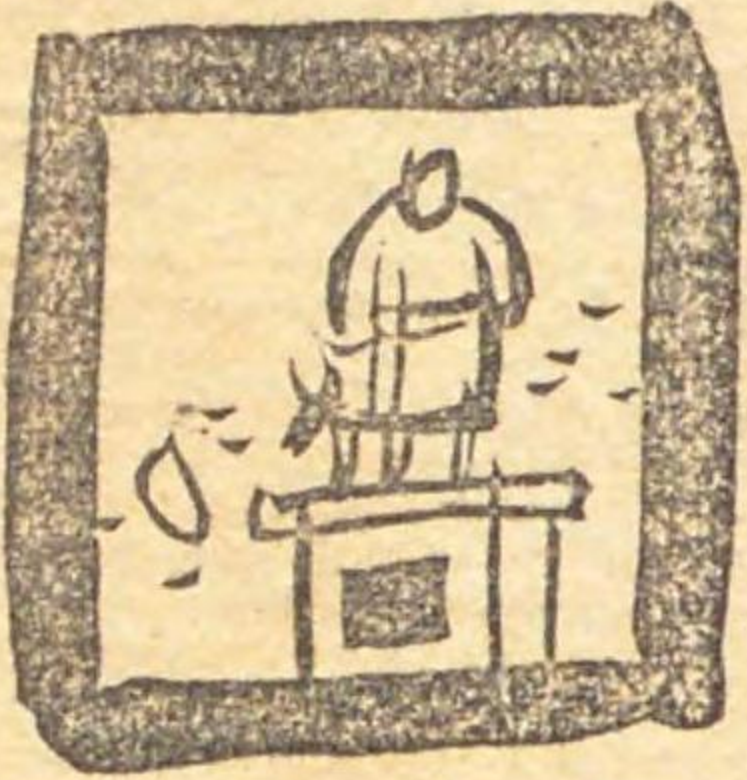
大正
2. 9. 27
内交



です。めぐりあひ一編は此の悲しい少女のその日、その日の涙の日記であります。
秋風が芭蕉の葉を破つて、虫の鳴く音の淋しき夕、此めぐりあひな手に取つて讀
んだならば、此の世にも、此處に不幸な少女があるかと、お愕きになるでせう。

大正貳年初秋

さ
ふ
ね



説小女少

めぐりあひ

さふね

(1) 姉の歸省

日は山の方へ傾むいた。向ふの森は日を後にしてゐるので黒くなつて來た。今夜は十六夜の月が出る頃である。

先刻から家の門口を行つたり來たりしてゐた女の子があつた。今日姉さんが暑中休暇で歸へると言ふので、未だか未だかと待つてゐる。名は秋子と言つて名前からして淋しさうな娘でした。

此家は或る村の財産家で何一つ不自由なく暮らして居るが、たい秋子と今日東京から歸つて來る姉さんにとつて、不足と言ふのは父さんも母さんもほんたうの父さんでも母さんでもない事

両親は早く亡なくられて、今は伯父おじさんに當ある人が家の相續人さうぞくじんになつて假かりに父とうさん母かあさんと呼よんで居かる、それが何なによりも心こころだよりにならないことであつた。それかと言いつて今の父とうさんや母かあさんが二人ふたりを大切たいせつにしないのではありませぬ。自分の娘むすめのやうにしてはゐるが、秋子あきこにとつて天てんにも地ちにも慕したはしいのは姉ねえさんの千枝子ちえこ一人ひとりであります。その千枝子ちえこさんが今日けふかへると言いふので、秋子あきこの喜よろこびやうは大變たいへんなもので、昨夜ゆふべも一昨日とひの夜よも、姉ねえさんの歸かへつて來くる夢ゆめを見みたり、囁ささや言ことを言いつたりする程ほどで、どの位くらかに姉ねえさんをまちこがれて居をるのか判わかりませぬ。誰たれだつてこの喜よろこびやうはもつともだらうとおもひませう。昨夜ゆふべはまんじりともしないで、今朝けさは早くから起おきて。

「姉ねえさんは何時なんじ頃ころにおかへりになるでせうね。」

と今朝けさから何なんど度ど母かあさんに聞きいたか判わかりませぬ。その度たびに母かあさんは、

「三時じ頃ころにはかへるよ。」と言いふと秋子あきこさんは、

「三時じ頃ころつて、最もう何なんじ時間かん?」

「未まだ七八時間じかんあります。」

「長ながいわねえ。」

「そんなに姉ねえさんのかへりが待まち遠とほしいの。」

「え。」とニツコリして秋子あきこさんは「だつて姉ねえさんは一年ねんに一度どしかお歸かへりがないのですもの。」

「これからは毎日まいにち姉ねえさんの側そばに居かまれるではありませんか。」

「だつて又またすぐ東京とうきやうへかへつて了しまふ。九月くわつになれば……。」

「そりや、學がく校かうがはじまるのだから仕しかたがない、秋子あきこさんだつて大おほきくなつたら行ゆけるのだからそうしたら姉ねえさんのやうに東京とうきやうへ行ゆくさ。」

秋子あきこはそれから何なんども一ひと母かあさんの所ところへ行いつては未まだ三時じにはならないの、未まだなのと言いつて聞きくのでした。時計とけいが一時じを打うつと最もうあと二時間じかんだ。もう停車場すていしやんへ着ついた、もう一時間じかんでかへるに違ちがひないと獨ひとり秋子あきこは待まちちこがれてゐるのであつた。傳くるまの音おとが聞きこえる度に姉ねえさんではないかとおもつて飛出とびだして見みると、荷車にぐるまであつたり他ほかの人ひとが乗のつてゐる傳くるまであつたりするので、その度たび毎ごとに秋子あきこはガツカリするのでした。

漸やがて三時じが鳴なつた。

秋子あきこは飛出とびだして見みたが姉ねえさんの傳くるまは見みえない。何なんだか心配しんぱいになつて來きてならないので秋子あきこは母かあ

さんに、

「姉さんは未だなので
せうか。」と訊いた。

母さんは秋子さんの
言葉を聞いて、

「最う歸りますよ。さ
う喧ましく言つたつて
歸らないものは歸らな
いし、歸るものは歸る
のですから黙つてゐら
つしやいよ。」

と叱り付けました。

秋子さんは何だか姉さんの歸へりがおそいので悲しくなつて、
猶更に泣き立てました。



「見ると
何を
あつたり

他人が乗つて
俥であつたり

× 秋子はそれを聞く
と何だか情なくな
つて来て、ワツと
泣き出しました。
「何をこの娘は泣
くの、そんなに姉
さんに會ひたいの
なら停車場なり何
處へなりと行くが
可い。母さんは秋
子さんのやうな泣
虫は大さうひさ。」

「未だ泣いてゐるの。」

母さんは別に秋子さんが悪いのではないが、あまりやかましく泣くので、うるさくてたまらな
い。傍で泣き立てられるので腹が立つて来た。

「母さん、姉さんは未だなのでせうか。」

「知らないよ、姉さんに會ひたいのなら、何處へなりと勝手に行くが可い。母さんはかまはない
から。」

未だ十二三歳にもならないけれども、伶俐な秋子さんは母さんが怒つてゐるので、泣きながら
立上つて、裏の庭の方へ行つた。

ほんたうに姉さんは何うしたのでせう、私がこんなになつてゐるのにまだかへつてゐらつしや
らない。何うかなすつたのかしらと考へてゐるといきなりうしろから、

「秋子さん、何をしてゐます。」

びつくりして振向いて見ると母さんですから、秋子は又叱られるかと思つてビクビクしながら
「姉さんの来るのを待つてゐるの。」

「姉さんは裏口からは来ませんよ。鼠みたいな姉さんだから来るかも知れないね、そこには大切な草が生えてゐるのだから立つてゐてはいけません。」

秋子は、何か言へば母さんに叱られたりするので、情なくなつてしまつて、何うしたら可いかと考へてゐると、母さんはそんなこととは知りませんから、

「早くのかないの。」

と言ふよりはやく秋子を突きました。力のよはい秋子は突かれて何うしてたまりませうか、そのまゝ草の上に倒れてしまつた。それを見ると母さんは大變に怒つて秋子を引摺り起しながら、

「秋子さん、何故こんな草を倒してしまつたの、父さまに叱られても仕方がありませんよ。母さんは叱られてもあやまつてはあげないから勝手にするが可い。さア、こちらへお出で。」

秋子は何うされるか判らないので、

「可厭だ、可厭だ。」

と言つてなかく行かないので、母さんは力を一杯に出して秋子を抱上げて。

「お前のやうに泣く子はほんたうにうるさい、お藏へ入れてしまふからその積りでおいで。」

「母さん、あやまりますから勘忍して下さい母さん。」

と一生懸命に泣

き叫びますが、母

さんは耳にも入れ

ない。ドン／＼と

抱いたまゝお藏の

前へ来て、重い戸

を開けるが早いか

秋子を入れてしま

つた。秋子は暫時

泣いてゐたが、起



き上つて見ると自分はお藏の中に入れてゐるので、重い戸を叩いて、

「母さん、母さん」

と呼びましたが誰

も来て助けてくれ

る人はありません

秋子はくたびれて

しまつたがそれで

も、小さいやはら

かい手で重い戸を

叩きながら、

「母さん、母さん。」と呼びましたが矢張り誰も来ない。今は戸をたたく勇氣も呼ぶ聲も出ない。疲れ切つてしまつて、ボンヤリとして居ました。

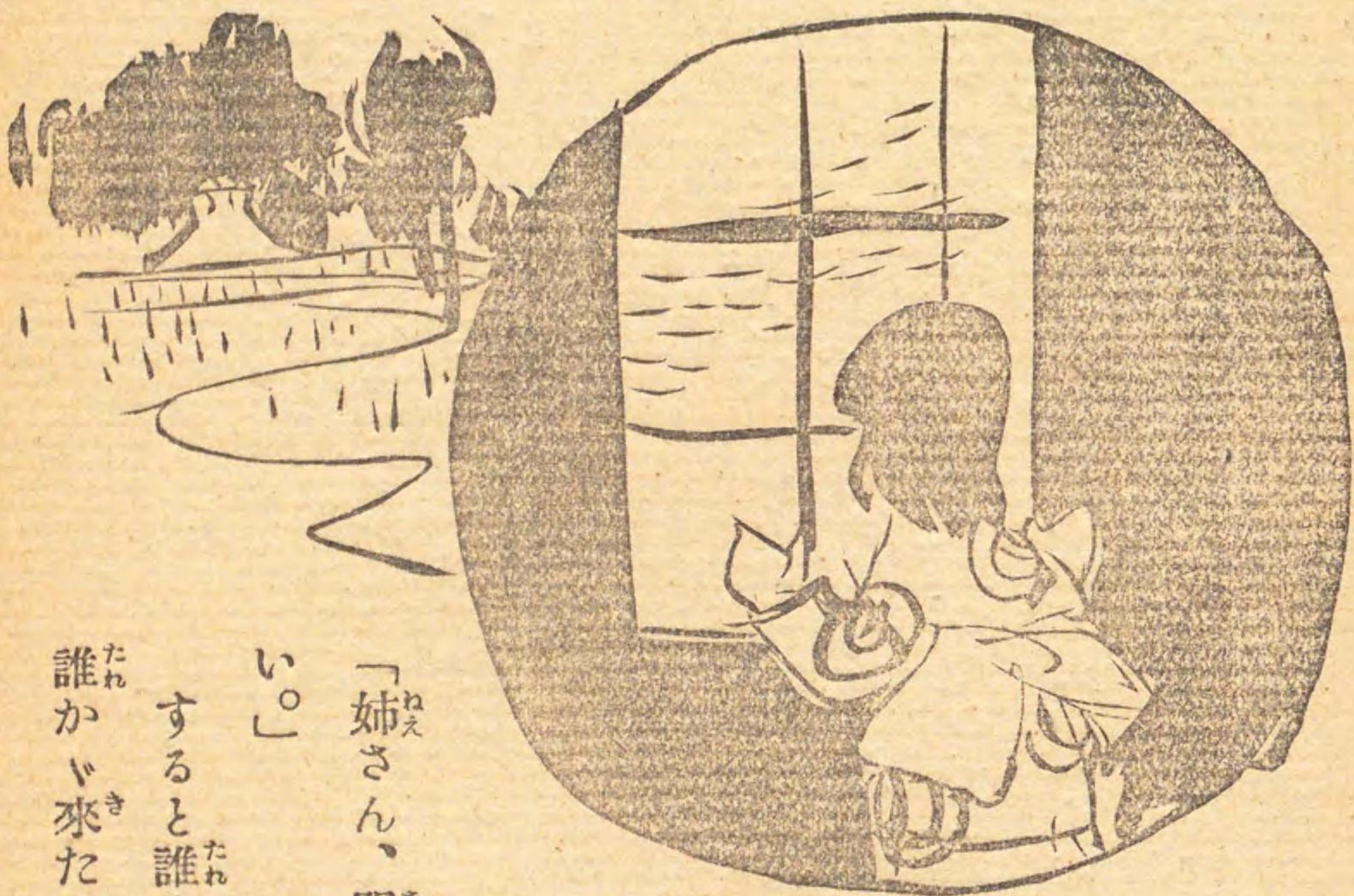
姉さんはもうおかへりになりさうなものだと思ひ出すと出たくてたまらない。早く出て姉さんがおかへりになつたか見たい。見たいとおもひましても何分にも藏の内のことですから何うにも仕方がありません。いろ／＼に考へた果に、お藏の二階の窓から首を出してみました。すると遠くの方まですつかり見えます。秋子は喜んで窓に絶つて見ました。

未だ日は落ち切らない。太陽は段々と沈んで行く。日の光が紅く藏の中まで射込んで来てゐる。秋子はジツと見てゐたが姉さんの俤らしいものは見えない。泣くのも忘れて、未だか未だかと思つてゐましたが見えない。いよ／＼今日はかへらないのかとおもふと心細くなつて来ました。父さんのお歸へりはおそいし姉さんもかへらないと私を出してくる人はない。姉さんが早く歸つて来て下さると可いだけどと思つてゐると……向ふの方から俤の影が見える。よく見てゐると姉さんらしい、秋子は何も彼も忘れて見てゐるのでした。

俤の影は次第に見えて来たので秋子は一生懸命になつて見てゐた。段々と影がハッキリとして

来た。よく見ると姉さんらしい。秋子は喜んで二階から夢中になつて、自分が藏へ入れられたのも忘れて見てゐましたが、姉さんが歸つて来たので、トン／＼と二階から下りて来た、出やうとすると戸が閉つてゐるので開けやうとしても開かない。

「姉さん、姉さん。」と叫んだが聞えないのか何うしたのか誰も来ない、秋子は何



うかして出たいものだと力を出しても、少女の腕ではあきません。その上に重い戸には錠がかつてゐるので、大人だつて開かないので、秋子は何うしてよいのか判りません。悲しいのを乗り越して夢中になつて、

「姉さん、開けて下さい、開けて下さい。」
すると誰やらの足音が聞えました。
誰か来たがそのまゝで開けてくれま

せん。

「開けて下さい。」

「黙ってお出で。」と言ったのは母さんでした。

「母さん、後生ですから開けて下さいね、後生ですから、私早く姉さんに會ひたいのよ。」

「待つておいで、最う少したつたら出して上げるよ、未だ姉さんは戻らないよ。」

「かへつて来たやうだわ。私見たのですもの。」

「嘘を突くと承知しないよ。」

と言捨て、母さんは行つてしまつた。出してくれるかと思つてゐましたが、開けてはくれないのでガツカリして又泣き出しました。すると誰やらの足音が聞える。誰だらう。姉さんかしら、母さんかしら、母さんだと又叱られるとおもつたので黙つてゐました。その足音はそのまゝに消えてしまつたので、何だか秋子は力が落ちて、姉さんは未だかへらないのかと心配し出しました。すると靴の足音が聞えます、父さんか姉さんだと思つてよく耳をすましてゐるとその足音はお蔵の戸の前で止まりました。

秋子は小さい聲で「姉さんなの？」

と訪きました。

「え、私よ、今出して上げますよ。」

「早く出して

下さいよ姉さ

ん、早く。」

と催促をし

てゐました。

姉さんは母さ

んに知れると

悪いと思つた。

何故もつと早くかへつて来て下さらなかつたの。」

「姉さんはね、一汽車おくれてしまつたものですからそれでこんなにおそくなつたの、秋子さん



×ので、静かに戸を開けました。すると秋子は戸が開くや否や姉さんに飛付いて「姉さん、

何うしてお藏へなんか入れられたの、悪いことをしたのでせう。」
「さうぢやないの。」と秋子はその譯を話しますと、それを聞いてゐた姉さんは涙をぼろ／＼とこぼして、

「さう、秋子さん、獨でつらいでせうねえ、姉さんが男だとこんなことはないのだけど、ねえ心配したり泣いたりしてはいけませんよ。姉さんが付いてゐますからね、ほんたうに、秋子さんを連れて東京へ行けると可いのだけど……。」

「姉さん、私東京へ行つて姉さんと一緒に居たいわ、連れて行つて下さいね。」

「え、連れて行かれるなら連れて行つて上げるのだけど、秋子さんは未だ幼いしするから連れては行かれないわ。」

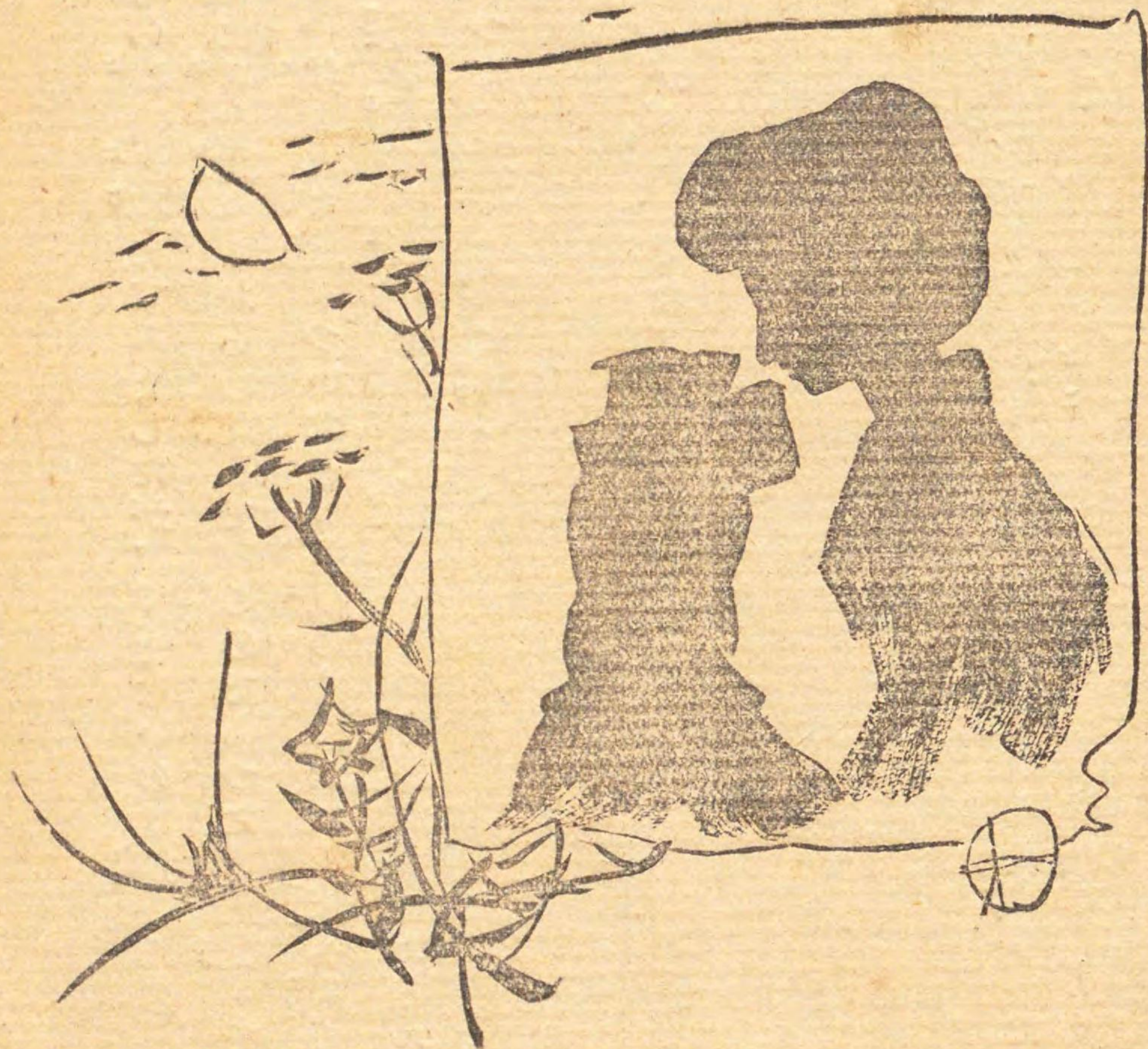
「ねえ、姉さん、私ね、姉さんと一緒なら何處へでも行くわ、ですから歸へるとき東京へ連れて行つて下さいね。」

「秋子さん、東京と言ふのは二十里もあつてそりや遠い所よ。」
「遠くたつていゝわ。」

「私だつて、連れて行かれるのなら連れて行くのだけど……。」と姉の千枝子も泣くのであつた。

父母はあつても生みの親でない此薄命な姉妹は二人ともしつかりとだき合つて聲を忍んで泣いて居るのでした。

日はもうこの時には暮れ切つてしまつて、四邊は暗くなり、月が出て來ました。二人の哀れな姿を何も知らない、清い月は水のやうな光を流して二人を照してゐるのでした。虫までも二人の悲しみを悲しむやうに鳴いてゐる。姉の千枝子は一人で残つてゐる妹のことを思ふと何うし



てよいか判らないのでありました。

姉さんがあやまつてくれたので秋子もその夜は無事にすみました。が、すまないのは姉さんの心の中で、何うしたら妹の秋子が苦勞もせずに日を送れるかと心配してをるのであつた。久振り姉妹は一緒に寝ると言ふので秋子は喜んで、姉さんに縋りついたまゝ晝間のくたぶれで床へ入るなりスヤ／＼と臥てしまつた。その無心の様を見て千枝子は猶更に悲しくなつて思はず泣いてスヤ／＼と臥てゐる秋子の顔に熱い涙がかゝつた。秋子は眼を醒して、

「姉さん、何うかしたの。」と訊いた。

「いゝえ、何うもしないのよ、たゞ秋子さんが可哀想でね。」

姉さんは秋子を抱いたまゝ忍泣いた。

(2) 楽しい十日

姉さんの千枝子が家に居る間は、妹の秋子は何をするにも頼りにしてゐた。母さんに叱られた時にあやまつてくれるのも姉さんであつた。だから姉さんが何處かへ散歩に行かうものなら屹度

ついで行くのであつた。そんなに仲のよい姉妹も、別れねばならない時が来た。姉さんの千枝子はあと十日で東京へ歸らねばならないのでありました。

今日は晝間は暑いので散歩にも出られません。晝寝をしました。すると、秋子は眼を醒ましてシクシクと泣いて居りますので姉さんは不思議に思つて、

「秋子さん、泣いたりして何うしたの？」と訊ねました。

すると秋子は泣きながらニッコリと淋しく笑つて、

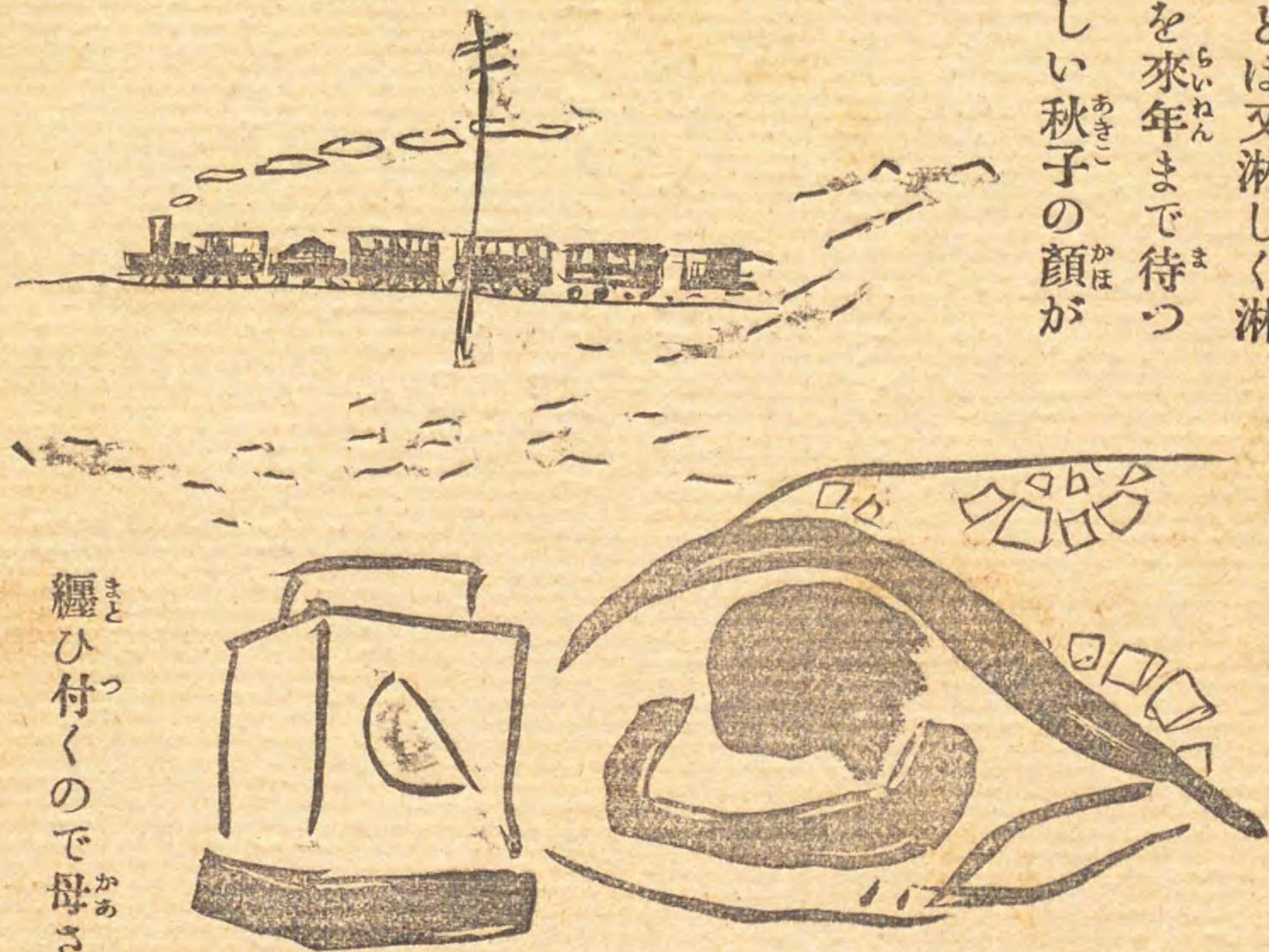
「姉さん、私ね悲しい夢を見たのよ、それで泣いたのよ。」

「どんな夢？」

「私ね、姉さんが東京へ行かうとしたものですから止めたの、すると姉さんが何んでも行くと言ふのですもの、私一生懸命に止めたのですけど、何うしても駄目なの、姉さんは汽車へ乗つて行つてしまつたの、それで私悲しくなつて泣いたの。」

姉さんはこれを聞いて居ると同じ様に悲しくなつて来た。何日か近い内に妹とは別れねばならないので、その時のことを考へ出すと悲しくなつて來るのです。秋子さんは泣いて私の袖に縋

るであらう、私の行つたあとは又淋しく淋しく秋子さんは私のかへりを來年まで待つて居ることだらう、その淋しい秋子の顔が見えるやうでならない。私達姉妹は何故こんなに不幸なのだらう、私はどの様に難儀してもよいが、この幼い秋子さんが可哀相でならない。連れて行かれるものなら東京へなり何處なり連れて行つて一緒に暮らしたい。それも出来ない。何うしても秋子さんは一人残し



纏ひ付くので母さんは時々姉さんの居ない

て行かなくてはならぬのかと思ひだすと心は千々に亂れて來る。是から先私の居ない間はどのやうに秋子さんは泣いて暮らさねばならないか知れない。千枝子は妹の顔をジツと見詰めました。秋子はたい姉さんが慕はしくて一時でも離れて居やうとはしない、あまり

間に叱つたりすることがあつたが、かへつて秋子は姉さんを慕ふやうになるばかりでありました。「姉さんは何日かへるの。」と、秋子は淋しさうに聞くのでありました。「最う十日もたつと東京へ歸へるのよ。東京へ行つたら何か買つて送つて上げませうね。」「私、何にも要らないわ、姉さんは何うしても行くの？」「え、學校が初まるからね、行かないと父さんにも母さんにも、先生にも叱られるからね、何うしても行くのよ。」「では何日今度はかへつて來て？」「來年の夏休か、今年の冬休みにかへつて來ますよ。」「未だ永い間があるわね、私ね何だか姉さんに別れるのが可厭になるわ、姉さんが行くとき一人限になるでせう、すると私を誰もかまってくれないでせう、夜だつて淋しくて淋しくてたまらなくなるのよ、ですから私も行きたいわ。」「秋子さん、そんなこと言つちや可厭よ、姉さんは悲しくなつてこまるわ、私だつて秋ちゃんを置いて行きたいとは思はないけど、心のまゝにはならないのだからね、私の歸るのをまつて居て

おくれね。」

「そりやまつて居るけど……姉さん！」と秋子は姉さんに抱付いて「姉さん、何故私たちの父さんや母さんはないのでせうね、もつと生きて居て下さらなかつたのでせうね。」

千枝子も妹を抱いたまゝ、「もうそんなことは言ひつこなしにしませうよ、姉さんはどんなに悲しいか知れないのよ、父さんだつて母さんだつて私達を置いて死にたくはなかつたでせうが、病氣で……もう何にも言ひつこなしよ、私ね、秋子さんのことがどんなに心配になるのか知れないの、秋子さん、もう泣くのを止めて散歩しませうね、今に母さんがおかへりになるからさうしたら行きませう。」

「え、だけどね姉さん、私ね時々母さんや父さんの夢を見ることがあるのよ、私その時には屹度泣くのよ。」

お話が段々と濕つて來ますので姉さんは秋子のために悪いとおもつていろ／＼と面白いお話をしますので、秋子さんは夢中になつてお話を聞いて居りました。その内に母さんが戻つて來ましたので秋子さんは姉さんと一緒に散歩に出掛けました。

日は漸く沈んだばかりで、うす明るい道を歩くには丁度よい頃でした。妹の秋子さんは姉さんから歌を教はつたり、お話を聞いたりして歩いたので、左程のくたびれはないばかりか、かへつて面白かつた。秋子さんも千枝子さんも別の日はあと幾日もないで、心の中は何とも言へない淋しさと悲しさで一杯なのでした。歌もうたつたり、お話も種がつきてしまふと、千枝子さんは残して行く秋子さんの事ばかり心配になつてな



薄明い道をおるくんは
丁度よい頃で

りませんでした。
私の行つたあと
はどうであらうと
そのことばかりが
氣にかゝつてなら
ない、私のたつた
一人の妹にも別れ
ねばならないのか
とおもふとその悲
しさはありません
でした。
「私、東京へは行

けないでせうか。」といきなり秋子が言ひますので、姉さんは驚いて、

「秋子さんは幼いもの、母さんや父さんがいけないとおつしやるから駄目よ。」

秋子はそのまゝ黙つてしまつたが、何だか淋しくて淋しくて、耐まらないと言ふ様子が見えま

した。それを見ると千枝子さんもかたく唇を噛み占めて聲を出すまいとして泣いてをりました。

これを何で秋子が知らずにをりませうか、いきなり姉さんの手にすがりついて、

「姉さん、泣いてゐるの？」

「いゝえ、姉さんは泣いては居ないよ。」と言つて顔を外しましたが、秋子は顔を覗込むやうにし

て、

「泣いてゐるわ。」と言つてしんみりとした。

「姉さん、何故泣くの。」と又訊きました。

「姉さんは何だか悲しくなつて、それで泣いたの。」

「姉さん、私はどうしても別れたくないわ、私を連れて行つて下さいね。」

と言ふには言つたが妹が言ふのも尤もなので何とも言ひやうがありませんでした。

四方がだん／＼暗くなつて來たので、姉さんは慌てゝ歸へりました。二人はしつかりと手を引

き合つて、淋しさうに歌をうたひながら、列んでかへりました。今日一日たてばあとは九日しか姉

さんは居ないのだと一日一日がおしくおもはれたのは、秋子ばかりではなく、姉さんも同じ思ひ

でありました。

(3) 早くお歸りよ

姉さんの千枝子は何かにつけても妹の秋子を大切にするので、母さんはあまり喜びませんでし

た。父さんは別に何とも思つては居ないやうでした。母さんがある日姉さんを呼んで此う言ひま

した。

「秋子さんはお前さんには大切な、たつた一人の妹だから、大切にすることも可いが、あまり大切

にすると、別れるときに泣かなくてはならないよ。」

千枝子さんは別に母さんを悪いとも何とも思つては居りませんが、たゞもう少し秋子さんを大

切せつにしてくれるといへとおもひましたが、そんなことは言へませんから黙だまつてゐた。

「何どうせ東京とうきやうへ歸かへらなきやならないのだから、早はやく歸かへつたら何どうだい。」

「早はやくつて、何いつ頃ころ？」

「明日あすにでも。」

「明日あすですか。」と千枝子ちえこはあまり急きよなので驚おどろいた。

秋子あきこは姉ねえさんの所ところへ行ゆかうと思おもつて、來きて見みると姉ねえさんは自分じぶんの室へやには居ゐないので、何どこ處こへい

らつしやつたのだらうと思おもつて來くると、母かあさんと何なにかお話はなしをしてゐますので、入はいつていへのか悪わる

いのか判わからないので、暫しばらく立たつてゐました。姉ねえさんも母かあさんもそんなこととは知しらないので、母かあ

さんはしきりに姉ねえさんに向むかつて、

「明日あす、かへることにきめたら何どうだね。」と言いつてをります。

姉ねえさんは自分じぶんは何いつ日かへ歸かへつたつて差支さしつかへはないが、あとに残のこる秋子あきこさんが可哀あいきやう想さうでならないので、

一日いちにちも長ながく居ゐたいと思おもつてをるので、何なんと言いつてもたつた一人ひとりの妹いもうとのことですから、残のこして行ゆ

のが辛つらくて仕方しかたがない。一日いちにちも長ながく居ゐれば秋子あきこさんだつて何どの位くらゐ嬉うれしく、たのしく日ひが送おくれるか

と思おもつたので、姉ねえさんは母かあさんに向むかつて言いひました。

「學がく校かうは十日とんが」

はじまるのですか

ら九日かにかへりた

いとおもひます。」

「そりやお前まへさん

の勝手かたてと言いふもの

だらうよ。お前まへさ

んはいつまで居ゐて

もいへたらうが、

それでは母かあさんが

困こまりますよ。秋子あきこ

がね、お前まへにばか*



家の姉妹は、お前さんの言葉を、何んでもあんなに、お前さん、聞いています。

* 懐なついて私わたしの言いふ

ことは些少すこも聞きか

ないのだから、お

前まへの歸かへつた跡あとで私わたし

がどんなに困こまるか

知しれやしない。ま

るで秋子あきこの眼めから

見みると私わたしはあつて

もなくとも同おなじな

のだらうよ、お前まへ

さんさへ居ゐてくれ

ればいへとおもつ

てゐるか知れないがさうはいかなよ、私がかゝの家の始末はして居るのですからね、何んでも明日歸つて貰ひます。」

千枝子はこれを聞きまして、あまりに亂暴な母さんのお言葉ですから、一時は驚きましたが、私になまじかに母さんの言ふことを聞かなかつたら、秋子さんがかへつてひどい目に會ふだらうと思ひましたので、

「ではお母さん、明日と言つてもいろ／＼と仕度もしなくてはなりませんから、明後日にして下さいな。」

「明後日とお言ひのかえ、勝手にするがいゝよ、姉妹で私を困らせやうとしてゐるのだから、何時でも都合のよい時がいゝよ。」

「母さん、そんなことをおつしやると私こまるわ。」

「母さんこそ困りますよ。私があれば程に言つて上げてても少しも聞かないぢやないか、だから何うなりとお前さん達は二人でいゝやうにするがいゝさ。」

「私ね、そんなつもりぢやないわ。」

「ぢや、どんなつもりなのだ。」

姉さんはあまり母さんの言ひ方が嚴びしいので途方に暮れてしまつた。明日かへらねば母さんからは叱れるし、歸れば何れも母さんのさうとたゝか言ひば／＼をせんよ。

ば妹が可哀想になるの

で、歸らうか何うしや

うかと困てゐました。

「ぢやね、明日かへり

ますわ。」

「勝手にするがいゝよ

私がかまはないから、

明日なりと明後日なり

と、十日になりと何日でも御都合のよい時になさい。」

「私何も母さんのおつしやることか。」



「何うせ氣には要らないのさ、お前さん姉妹はい、姉妹だよ、陰では私の悪口ばかり言つてゐて私の前へ来ると何も知らない顔をしてさ。」

「母さん、私何も母さんのことなんか言ひはしませんよ。」

「嘘をお突きでない、秋子がお前の言ふことをきかないのは皆お前の指圖だらう、それに違ひないのさ、何うせ私はお前さんの母さんぢやないのだからね、私の言ふことは聞かなくてもいいのさ第一お前からして、何かにつけて私に手向つてばかりゐるぢやないか、だからあの小さい秋子までが私を馬鹿にしてゐるのだよ、明日はね何うしても東京へかへつて貰ふからその積でおいで。」

千枝子は斯うまで言はれると悲しくなつた。何うしても明日は歸らねばならないのかと思ふと秋子がかわいさうになつて、あとで甚麽目に會ふだらうとそのことばかりが氣にかゝつてならぬ。此上に母さんに彼これと言つたらどのやうに叱られるかも知らないのでその儘黙つて自分の室へ戻つて来て机の前へドカリと座つた。

明日かへると秋子が聞いたら何んなに驚くだらう、何も言はずに置いて不意に行かうかしら、それでは後で力を落して病氣にならないものでもない。秋子には黙つてゐるやうか、それとも聞か

さうかと考へて居ると誰か室へ入つて来るやうだ、誰だらうと思つて振向くと、心配してゐた當人の秋子が淋しさうに入つて来るので、若しやあの話を聞いてゐたのではあるまいかと思つた。

秋子は姉さんの室へ入ると行成に姉さんの方へ驅けて来て、

「姉さんは何日かへるの。」と心配さうに訊いた。

「姉さんはハツとしたが知らない顔をして「未だ判らないのよ、何日だか判らないのよ。」

「姉さん、明日かへるのぢやないの、私ねえ聞いてゐたのよ、何うしても明日かへるのね。」

「秋子さん、聞いて居たなど、大きい聲を出しては不可ません、母さんの耳に入らうものなら叱られますよ。秋子さんは何も彼も聞いてゐたのね。」

と言ふと秋子は點首くのでした。

「私ね、明日かへりたいのではないがね、母さんがあんなにおつしやるのだから仕方ありません、何うしてもあしたかへらななきやならないのよ。」

「姉さん、私も連れて行つて下さいな。」

「そんなことをしやうものなら母さんに叱られますよ、だから秋子さんは温順しく待つてゐらつ

「いや。」

「私、可厭よ。」

「可厭だなんて言つては困るわ。」

「だつて、私一人になれば淋しくて困るわ、母さんには叱られてばかり居るのですもの、ねえ姉さん一緒に連れて行つて下さいよ。」

「連れて行つて上げたいけど、そうは行かないよ。」

「母さんが不可ないと云ふの。」

「え、だから連れてはいかれないのよ。」

「私、それでは母さんに聞いてみるわ。」

「そんなことを聞かうものなら叱られちもうわ、何故秋ちゃんと言ふことをきかないの。」

「でも、私、姉さんだけは別れたくはないわ、姉さんが居ないとね、私毎日母さんに叱られたり打たれたりするのですもの。」

千枝子は妹の身の上が心配になるが、それかと言つて連れて行くことは出来ないで、何うし

たらいゝかとおもひなやんでゐました。

「母さんはそんなに秋ちゃんを打つたりなにかするの？」

「え、姉さんが居ないとね、少しでも口答へするとすぐ打たれるわ、泣けば結へられたりするのですもの、私ね時々姉さんの所へ逃げて行かうと思ふことがあつてよ。」

「逃げて来やうと思ふことがあるのですつて。」

「え、何度あるか知れないわ、その時には姉さんが居て下されば私も打たれずに済むと思つてよ。」

姉さんはジツと秋子を見て、

「秋ちゃん、甚だに辛いことがあつても、逃げて来たりしてはいけませんよ、秋ちゃんさへ母さまの言ふことをよく聞いてゐれば、母さまだつて秋ちゃんを叱りはしないのだからね、そんな考へなぞを起してはいけませんよ。」

「え、私、逃げてなんか行かないわ、そのかはり姉さん、もつと長く居て下さいね。」

「居られるものなら居て上げたいけど、明日は歸らなくてはならないのだからね………」

と千枝子も途方に暮れてしまった。

秋子は「姉さん、私ね、父さまに願ひして見るわ。」

「いけませんよ、それでは母さんによくないから。」

「では何うしても明日行くの。」

「え、仕方がないのですもの。」

は驚いて顔色を變へてしまひました。姉さんは隠しては悪いとおもつて、



秋子は何うしても行くと言ふことを聞いて淋しさうに首垂れてしまつて、

「私、つまらないわ、つまらないわ。」

と姉さんの手を握つたまゝ言ひました。

「二人で何を話してゐるのです。」

といきなり母さんが入つて來たので、二人

「秋子さんがあまり可哀相ですから、何うしやうと思つてゐましたのです、ねえ母さん、七日か八日の間ですからその間だけ待つて下さいね、私はどうせ歸へるのですからいゝのですけど、秋ちゃん可哀相ですからね。」

「未だそんなことを言つてゐるの、お前さんの勝手にするが可いちやないかね。」

秋子は母さんの權幕に愕いてゐたが、母さんが勝手にするが可いちやないかと言つたので、叱られるのも忘れてしまつて、

「母さん、姉さんを最う少し置いて下さいね、私、淋しくて仕方がないのですもの。」

「秋ちゃんまでがそんなことを言つてゐるの、二人は共謀になつて私を何うかしやうと思つてゐるのだね、そりや駄目だよ、姉さんは何うしても明日は歸らなきやならないよ」

と突慥に言ひました。秋子は猶も母さんに縋つて、

「母さん、後生ですから姉さんを最う少し置いて下さいね。」

「うるさいね、この娘は、姉さんがお前にさう言へと言つたのだらう、そんなに二人して共謀になるなら母さんだつて言ふことは聞かない。」

と言つて出て行かうとしますので、秋子は一生懸命になつて、

「母さん、お願いですから。」

「可厭だよ。」

と言つて踵り付く手を拂つたので、秋子はヨロ／＼とよろめいて倒れさうになつた所を母さんが押したので、バツタリと秋子は倒れて鬨の上で頭を打つた。秋子は痛さにワツと泣いた。姉さんは愕ろいて駆け寄らうとすると母さんは姉さんを押のけて、

「お前は何をするのだい。」

と叱り付けたので姉さんは黙つて見てみると、母さんは腰帯で秋子を結へやうとしたので愕ろいて、

「母さん、何も秋子さんは悪いのぢやないのですから許して下さい。」

「いゝえ、不可ない、癖になるから。」

「秋ちやんを結へるなら私を代りに結へて下さい。秋ちやんは何も知らないのですから、母さん夫りやあんまりぢやありませんか、秋ちやんは何か悪いことをしましたか。」

「そんなことは何うでもいゝ。」と言つて秋子をグル／＼と結へやうとします、秋子は結へられまゝいと一生懸命になつて悶えました。

「何をしてゐるのだ。」

と思掛けなくも父さんが歸つて來たので、姉さんは喜こんで、父さんに譯を話さうとしますので、母さんは話されては困まるとおもつたのでそのまゝ秋子を許してくれました。

父さんと母さんが行つてしまふと、姉さんは秋子さんの體をさすつてやりながら、

「秋ちやん、痛かつたでせうね。」

秋子はサメ／＼と泣いてゐたが、

「姉さん、私、何うしても東京へ行きたいわ。」

姉さんは「あんなことがよくあるの。」

秋子は泣きながらうなづきましたので、姉さんは可哀想になつて、

「よく秋ちやんは辛抱してゐるのね、姉さんも秋ちやんが氣の毒になつて何うかして上げたいとおもふのよ、さア、泣かずにそこらを散歩して來ませう。」

いよいよ明日はかへらねばならないのかと思ふと、先立つものは涙でした。はかない姉妹二人が思ふに委せず、西と東に別れねばならないのは何と言ふことでせう、こんなに幼い秋ちゃんに何處が悪いのでせうか、何故母さんは私達が憎いのかしら、それにしても残して行く秋ちゃんが心配でならないと姉さんはかんがへ込むのでありました。二人は散歩に出ましたが左程に面白くありませんでしたからすぐにかへつて来ました。

(4) 悲しき別れ

二三日すると千枝子は何うしても歸へることになつた。昨夜は秋子は姉さんに絶り付いたまゝ泣いた。今朝も起きると姉さんの側を少しも離れない、そのいじらしい様子を見て父さんは可哀想に思つて、停車場まで一所に俥に乗せて行つて来るが可いと言つたので、秋子は喜んで行つた。俥に揺られながら二人はいろ／＼な話をした。

「秋子さん、母さんの言ふことは聞かなくては不可ないよ。」
「えゝ。」と秋子は淋しく笑つた。

あの森、この小川、秋子にも千枝子にも悲しい懐しい思出であつた。螢を追つて秋子が川と知らずに落ちたのもつい先達であつた。あの森で蟬を捕へたのも近頃のことであつた。何かと言つてはあの森へ来て二人は涼しい風に吹かれながら一日を短く暮らしたのであつた。何も彼も、今は夢となつてしまつたのだ。

長い二月に近い休暇は過ぎて歸へると言ふ今になつた。後に残るのは父さんや母さんや秋子だけど、淋しい淋しい秋子はこの頃の月を見ては思出しては悲しむことだらう、私も東京へ歸つても心は秋子の上にあるのだらう、私達姉妹は何と言ふことかしら、一緒に居たいと言つても居ることは出来ず、獨法師の秋子は獨法師になつて泣くことだらう。

日は高く天に昇つて、熱い光を投げてゐる、キラ／＼とする光は眼を強く射る。二人は蝙蝠傘を差してゐた。千枝子のはクリーム色で秋子のは麻の白いのであつた。

二人の俥は漸がて停車場の前に着いた。未だ汽車の来るまでには三十分ある。二人は停車場に入つて待つてゐた。

「秋子さん、逃げて來たりしては不可ませんよ、姉さんも休暇になればすぐ歸つて來て上げます」

からね。」

「何日かへつて来るの。」

「十二月のお休みには屹度歸つて来るわ。」

「十二月に、屹度でせうね。」

「屹度歸へるからね、よく母さんの言ふことを聞いてゐるのですよ、姉さんはたい秋ちやんのこととが心配になつてならないのよ、母さんだつて御無理はおつしやらないのだからね、秋ちやんきつと辛抱してゐるのですよ。」

「え、辛抱してまつてゐるわ。」

と言つてホロリと涙をこぼした。それと知つて姉さんの千枝子は、秋ちやんは私と別れるのがあんなにまで辛いのかしら、父さんや母さんはあつても、秋ちやんを大切にしてくれる人はないのだから無理もない、私が居なくなつたらどんなに苦勞するか判らない、と秋子さんのことを思ふと同じやうにホロリとするのでありました。

その中に汽車が来ると言ふのでプラットホームへ出てまつてゐました。すると間もなく汽車が

来た。秋子さんは姉さんが行つてしまふと言ふので、耐らなくなつて、

「姉さん、私も行きたいわ。」

千枝子さんは汽車に乗りは乗りましたが、窓外に立つてゐる秋子さんのシヨンポリとした姿を見ると、氣が沈んで來るので悲しさに胸が一杯になつて來た。

「秋子さん、私きつと冬のおやすみにはかへつて來るからまつてゐらつしやいよ。」

「姉さん、何うしても行くのね。」

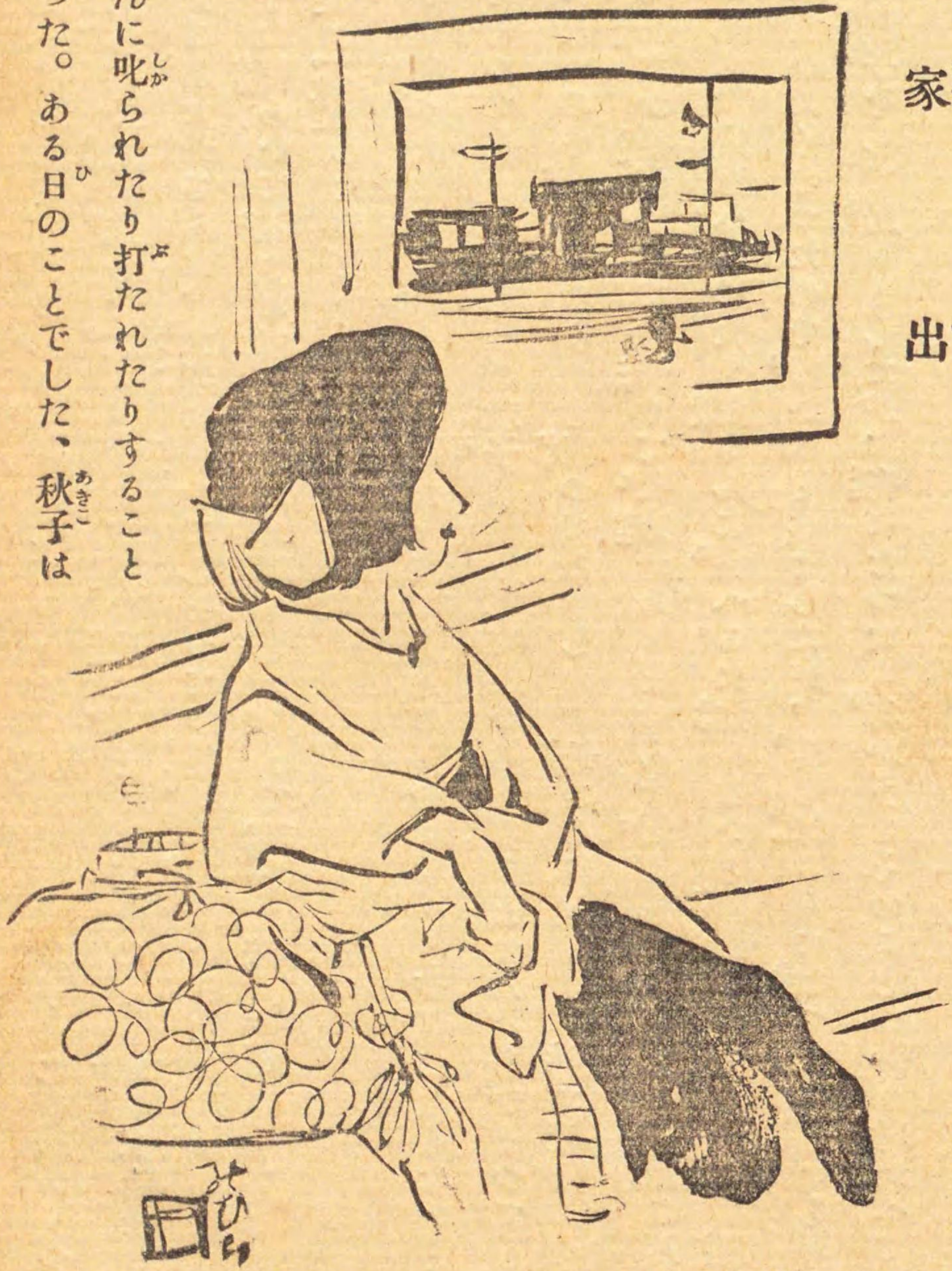
と秋子さんはポロ／＼と泣いてをります。

「秋ちやん、機嫌よく別れてね、姉さんは悲しくなつて仕方がないわ。」

と言つてゐる中に汽車は動き出したので、秋子は一生懸命になつて走りながら、

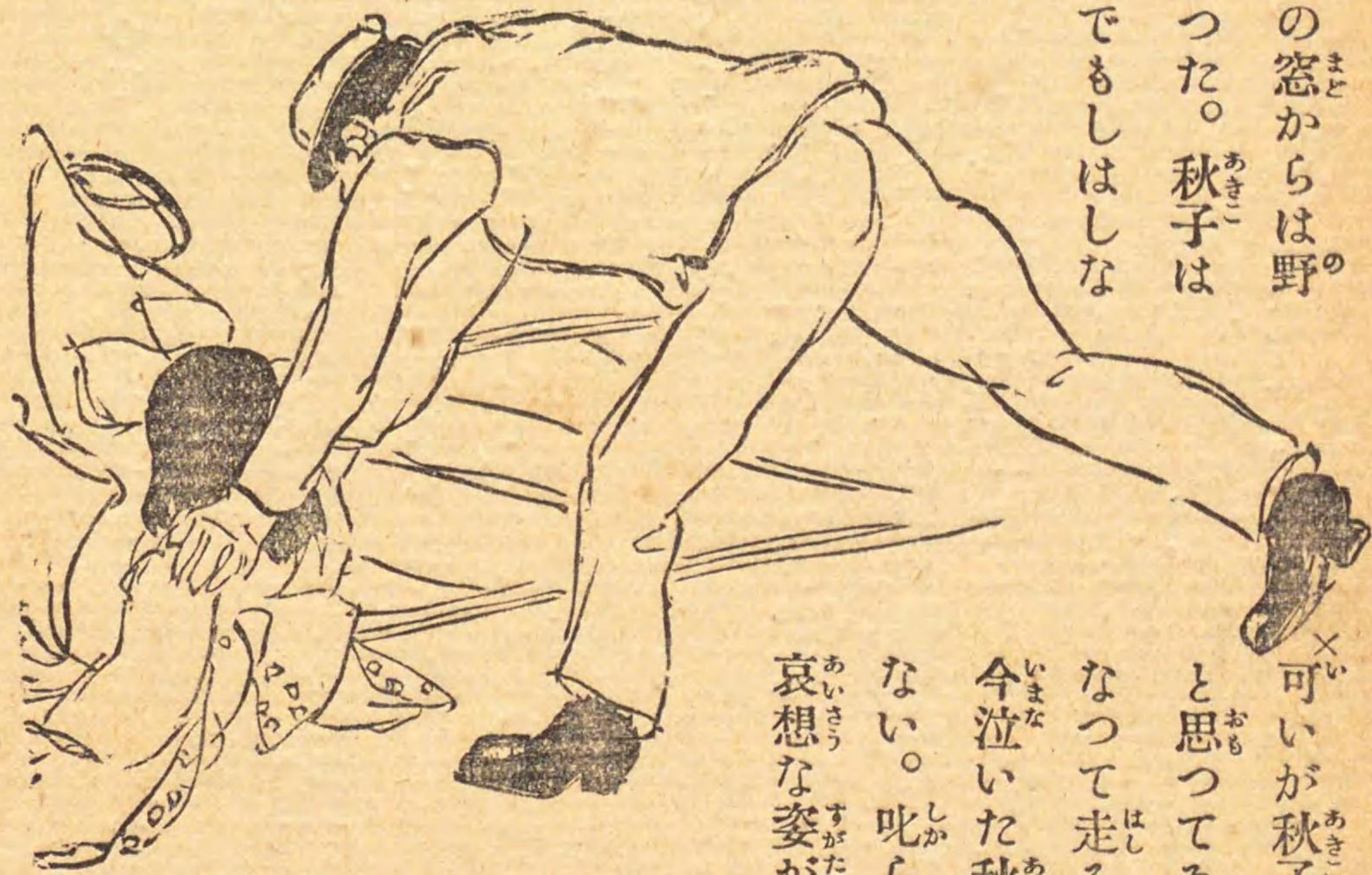
「姉さん、左様なら、左様なら。」と言ふ聲も涙の一杯たまつてゐる聲でした。姉さんは秋子さんが汽車を追つて來るやうに見えたので、あぶないあぶないと思つてゐる刹那に、驛夫が秋子を抱き止めたやうですから、ハツとしてあ、秋子さんは怪我でもしたのかしらと急に心配になつて、窓から首を出して見たが最う見えない、停車場の形が段々と小さくなつて行くばかり、それも見

秋子は姉さんが
 行つてしまつてか
 らは淋しくなつて
 何に付けても思出
 すのは姉さんのこ
 とであつた。姉さ
 んが行つてしまふ
 と誰も秋子をかま
 ふ者がありません
 ので、秋子は母さんに叱られたり打たれたりすること
 が毎日のやうであつた。ある日のことでした、秋子は



(5) 家出

えなくなつてしまつて、汽車の窓からは野
 や畑や田が見えるばかりであつた。秋子は
 何うかしたのか、あの時怪我でもしはしな
 かつたかと心配してゐたが
 汽車は遠慮なく東京へ、東
 京へと走つて行くのであり
 ました。
 今頃も未だ秋子さんは私
 のことを思つて泣いてゐる
 に違ひない、きつとさうだ
 逃げて來ると言つたが若し
 かすると逃げて來るかも知
 れない。私は何うなつても



可い秋子さんはほんたうに氣の毒だ
 と思つてゐる中にも汽車は次第に早く
 なつて走るのでした。千枝子の眼には
 今泣いた秋子の姿が残つてゐて仕方が
 ない。叱られて結へられやうとした可
 哀想な姿が眼に残つてゐる。
 千枝子は汽車の窓に突
 伏したまゝ、忍泣いてゐた
 風は千枝子の髪を亂して
 行つた。風のまに／＼何
 處からか秋子の泣聲が聞
 えるやうでならなかつた

獨り椽側に立つて考へてゐると、母さんの大切にされてをります猫が来て、秋子にじやれかゝつたので、秋子は何の考もなく足の先きで蹴りますと、猫は庭に落とされてそのまゝ逃げてしまひました。その様子を見て居た母さんは、大變に怒つてしまつて、後から来ていきなり秋子をお庭へ突落しました。秋子は驚ろいて泣きますと母さんが猫を抱き上げて秋子の方を睨みつけ、

「秋ちゃん、何故猫を突落したのだい。」

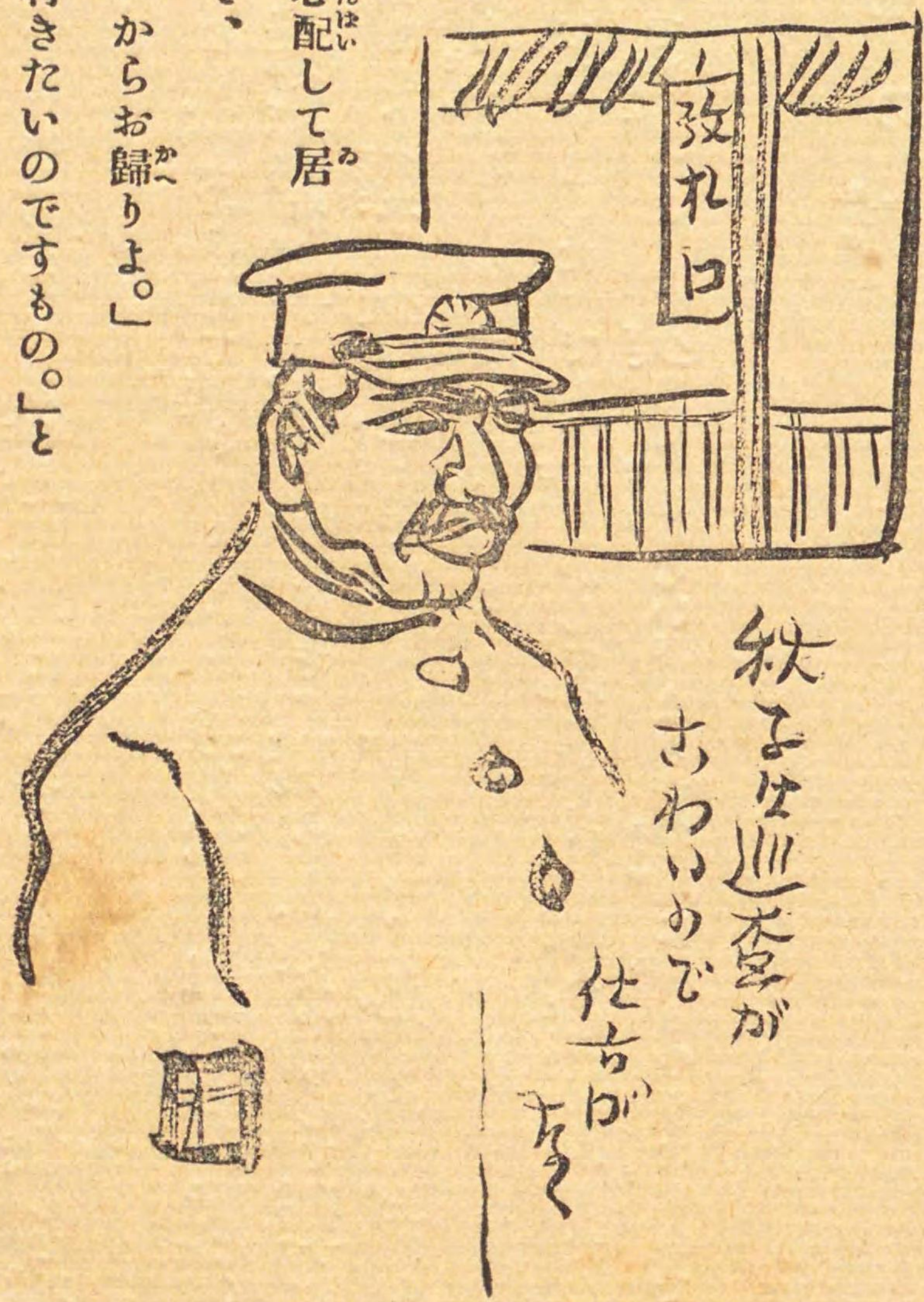
秋子は自分が悪いと思つたのであやまりました。するとそのあやまりやうが氣に入らないと言つて母さんは怒つて行つてしまひました。秋子は何うしてよいのか判りません。あやまつても母さんは許してはくれないので何うしやうかと思つてゐました。母さんがあんなに靜に何ともおつしやらなかつたので何だか後が怖くて、怖くて仕方がありません。何うしやうかしら、姉さんの所へ逃げて行かうかしら、東京へ行つたら姉さんに會へるに違ひないと思ひますと、矢も楯も耐らない、姉さんに會ひたくなつたので行かうとしましたが、若し母さんに判つては悪いとおもつたので、何くわぬ様子をして居りましたが、夜になつたら行かうとそのことばかり考がへてをりました。

東京と言つたつて判るまいと思ひましたので、姉さんから來た葉書を一枚出して来て、これを持つて行けば姉さんに會へるとおもつてゐました。自分の貯金と言つては幾何もありませんが、それでも東京へ行くだけのお金は漸々とありました。秋子は早く夜になれば可いにと待つてゐたが、仲々夜にはならない。暫く過と日が暮れて來たので裏口から出やうとすると母さんが何か用事をしてゐるので、表口から出やうとすれば、直ぐ見付かるので困つてゐました。その中に母さんは用事が済んでお座敷の方へ行つたので、此の時だと思つて、秋子は竊と家を出やうとすると、母さんが、

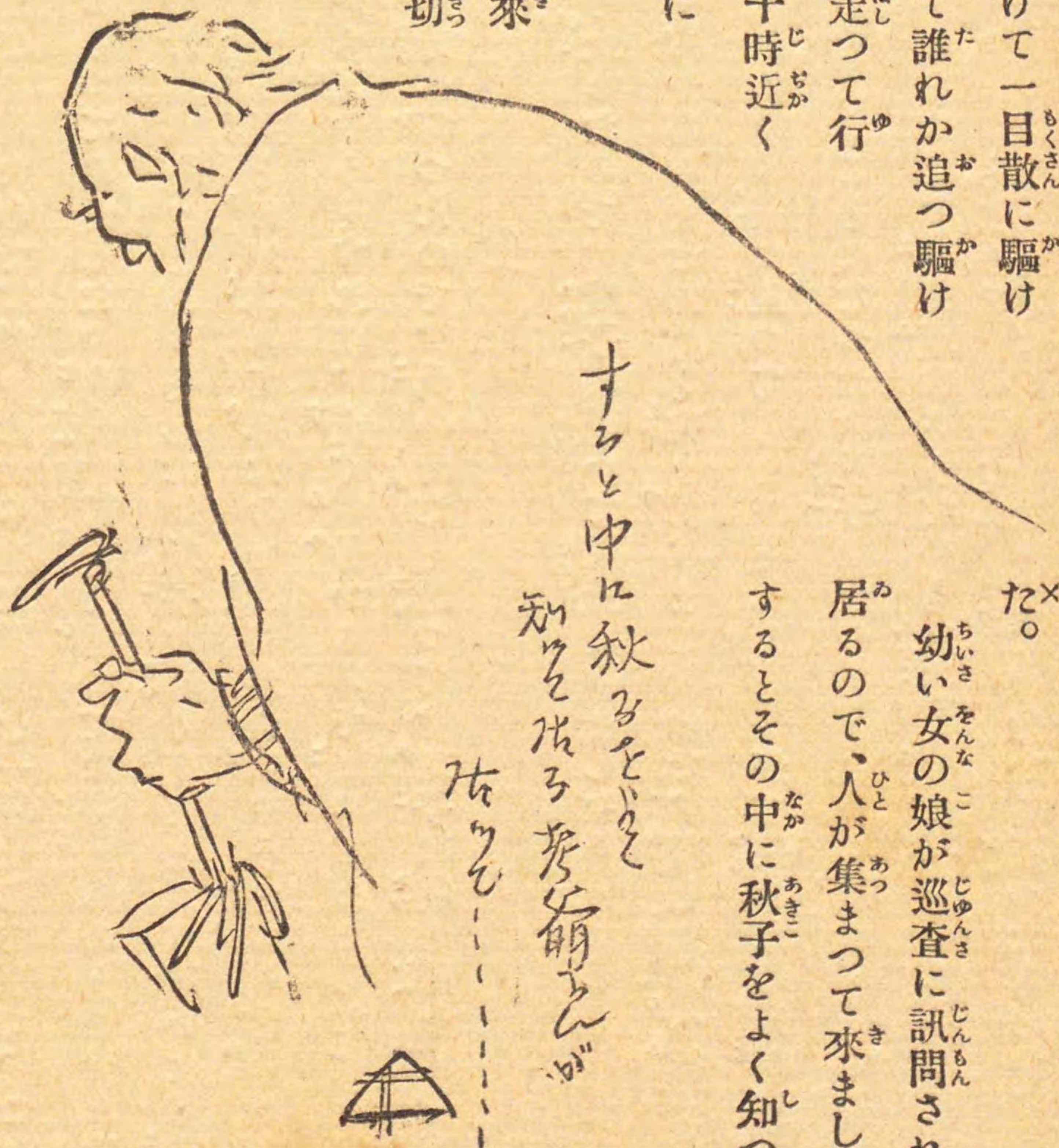
「秋子さん、何處へ行くの。」と呼止めたので、秋子は驚いて立止まりました。

「秋子さん、夜あすびに行くものぢやありません。」と叱り付けましたので、若し東京へ行くことが判つては大變だと思つたので、そのまゝ家に入つてしまひました。やがて母さんは用事が出來たので、秋子さんを連れて近所まで行くことになつた。秋子はいやくながら連れられて行きますと、母さんは先方でお話しが永くなつて、夜が更けさうだから秋子に先きへかへるやうに言つてかへしました。秋子はこれを聞いて東京へ行くのは今より外にはないと思つたものか、そこ

ある老爺さんが居つて、秋子を見ると、
 「秋ちゃんぢやないか、一人
 で何處へ行くのだい。」と尋ね
 ました。
 「東京へ姉さんを訪ねて行く
 の。」
 老爺さんは秋子の様子が變
 なので直ぐと逃げて来たを知
 りました。家では何のやうに心配して居
 るか知れないと思ひましたので、
 「秋ちゃん、一人では行けないからお歸りよ。」
 「私、可厭よ、姉さんの所へ行きたいのですもの。」と
 言つて泣きました。



の家を出るが早いから停車場へ向けて一目散に駆け
 出しました。母さんに氣付かれて誰か追つ駆け
 て來はしないかと心配しながら走つて行
 きました。停車場へ來るともう十時近く
 なつてゐて、淋しいが、さすがに
 近所には人が集まつてをつた。
 秋子は誰にも見付からないで來
 たので安心して、お金を出して切
 符を買はうとしますと、巡査
 がやさしく、
 「お前は一人かい。」とききま
 した。
 「はい。」と秋子は返事しまし



老爺さんも東京へ行くと言ふことを聞いて、晝間ならばこのまゝ逃してやつてもよいが、夜では途中どんな目に會ふか判らないとおもつたので、今度は巡査に向つて、くはしく譯を話して秋子を家まで送つて貰ふことにした。

秋子は巡査が恐いので仕方がなく家まで連れて戻されました。秋子の家では急に秋子が居なくなつたので、大騒ぎをしてゐる所へ巡査が秋子を連れて來たので、驚くやら喜ぶやらして秋子を引取りました。それからと言ふもの、秋子は少しも一人では外へは出られず、お金も皆取上げられてしまつて、何うにもかうにも出來なくなつてしまひました。

秋子は淋しい日ばかりを送つてをりました。でも、何うかして行きたいと思ふ心はやみません。母さんも今は厳しく見てゐるので逃出すことは少しも出來ない。まるで牢屋に居るやうなものでありました。

(6) 老爺の情

何うかして秋子は、東京の姉さんの所へ行かうと、そのことはばかりに心をつかつてゐた。そして

そんな素振りが見えれば見える程、母さんの方では要心をます／＼するので、逃げ出すことはおろか、散歩に出ることすら出來ない始末でありました。少し表へ出れば父さんか母さんか誰か付添つて來る有様でしたから少しも逃げ出す暇がありません。その間のたのしみは姉さんから手紙の來ることが何より嬉しく感じました。秋子はもう逃げられまいと思ひながらも、姉さんに會ひたい、見たいのころは段々激しくなつて來て、何うかして東京へ行きたいとその事ばかりに心配してをりました。

今日は父さんは朝から居りません。何か御用が出來て他所へお出でになつたのです。で秋子は今日は何うかして東京へ行きたいものだと思つてゐる所へ母さんが來て、秋子に言ひました。

「秋ちゃん、何故お前は姉さんに會ひたいの。」と訊きましたので、秋子は、

「私、何だか姉さまが好きなのよ。母さん、姉さんは何日ゐらつしやるでせう。」

「姉さんの歸りが私に判るものかね、そんなに會ひたいのなら勝手に行くが可い。」

秋子は母さんの權幕が怖ろしいので、黙つてゐますと母さんは、

「何故お前さんは黙つてゐるのだい、私にばかり物を言はせて、姉さんに會ひたいのかい。」

「え、會へるなら會ひたいけど。」
と言ひますと母さんは、

「そんなに會ひたいのなら會はして上げやう。」

「東京へ連れて行つて下さるの。」

「連れて行つて上げますとも、秋子さんのことですもの、今日すぐ行きませう。」

「今からすぐに、ほんたうに。」

「嘘を突くものですか、それにしてもその着物ぢや行かれないから、お藏へ着物を出しに行きませう、秋ちゃんの好きなのを着せて上げるから。」とまことらしく言ひました。

秋子は母さんに謀計があらうとは思ひませんので、喜び勇んで母さんと一緒にお藏へ着物を出しに行きました。お藏の中にはいくつも箆筒があつて、秋子さんの着物が澤山にあつた。

母さんは箆筒を開いて、着物を取り出して彼かこれかと選つてをりますと、漸がての事母さんは、便所へ行つて来ると言つて出て行きました。その時母さんはお藏の戸をガラ／＼と閉めてしまつた。二階に居た秋子はそんなこととは知らないで、自分の好きな着物を出して、それを着て喜

んでゐたが母さんが戻つて来ない。不思議に思つて秋子は下へ来て見ると戸が閉まつて居て、少

も何うしても開かない。秋子は母さんが謀計があつたとは知らなかつたので、大きい聲を出して、

「母さん！ 母さん。」
と呼んでも誰も来ない、母さんの姿も見えない、見えないはずで

す、母さんは最う他所へ出て出たいと考へたが何うにも仕方がない。二階へ来て窓から出やうとする

と、母さんは最う他所へ出て出たいと考へたが何うにも仕方がない。二階へ来て窓から出やうとする



と、母さんは最う他所へ出て出たいと考へたが何うにも仕方がない。二階へ来て窓から出やうとする

れない。出られたにしても、高い所だから下りれば直ぐに死んでしまふのだ。それでも何うかして出たいと一生懸命になつて窓から出やうとした。すると家へ老爺が来て、お藏の前で何かしてゐるので、秋子は、

「老爺！ 老爺。」と泣聲を出して呼びました。

お藏の前に居た老爺は自分を呼ぶ聲がするので、誰が呼ぶのだらうと思つて振り返つて見ると秋子さんが、お藏の二階の窓から首を出して呼んでゐるので、又あの母さんに入れられたのだ、可哀想な事だと思ひました。

「老爺、後生だから出して頂戴。」

「はい、今出して上げますから。」と言つて老爺はお藏の戸を開けやうとしましたが、錠が掛つてゐるので開かない、お座敷へ行つて見るとちやんと錠が置いてあるので、その錠を持つて来て開けた。秋子は喜んで、

「老爺、ありがたう。」と何度も「お禮を言つた。」

「何うしてお藏へなぞ入れられました。」

「私ね、今日は何にも悪いことはしないのよ、だけど母さんが東京へ連れて行つてやるからと言つて嘘を突いて私をお藏へ入れたの。」

「さうですかそり

や母さんが悪い。」

「老爺、母さんに

叱られるやうなこ

とはなくて、私を

出してくれて屹度

母さんに叱られる

わ。」

「老爺は叱られて

も大丈夫です、秋



何事かまで

「子さん、貴方はほんたうに東京へ行きたいのですか。」

「え、姉さんの

所へ行きたいけど

私一人で行けるか

しら。」

「行けますとも、

世の中には鬼ばかりは

ありません。」

と老爺は言ひながら秋子の様子を

見ると、ションポリとしてゐるのでいかにも可愛さうにもなつて、

「停車場まで老爺が送つて上げませう。東京へ行く汽車賃位は此處に持合せて居るから、彼所へ着いたら巡査に會つてよく東京の姉さんの所を聞くのです、そうすれば姉さんに會へます。」

と言ふには言つたが又心配になつて來た。自分が行けるものなら行つてやりたいと思つたがさうも出來ないので、誰かに頼んで見やうと兎に角停車場まで行くことになつた。

「母さんの歸らない内に早く行きませう。」と老爺に急立てられて秋子は夢中で急いだ。停車場まで來て見ると、丁度東京まで行く人があると言ふので、老爺はその人に頼んで秋子を東京まで連れて行つて貰ふことにしました。秋子は久しい間の望みが叶つたので、もう嬉し喜んで行くことになつた。

「後のことは老爺が引受けますから安心して姉さまの所へゐらつしやい。」

と老爺は元氣よく言つた。老爺が元氣よく言つてくれたので秋子も喜んで、

「老爺、いろいろと難有うよ、この恩は忘れないわ。」

「恩などゝそんなことをおつしやるものぢやありません。お二人を今に爺が御安心させますから

暫らく東京で姉さまと御一所にお暮しなさい。道中は氣を付けて行くのですぞ。」

「えゝ、ありがたう、老爺それでは左様なら。」

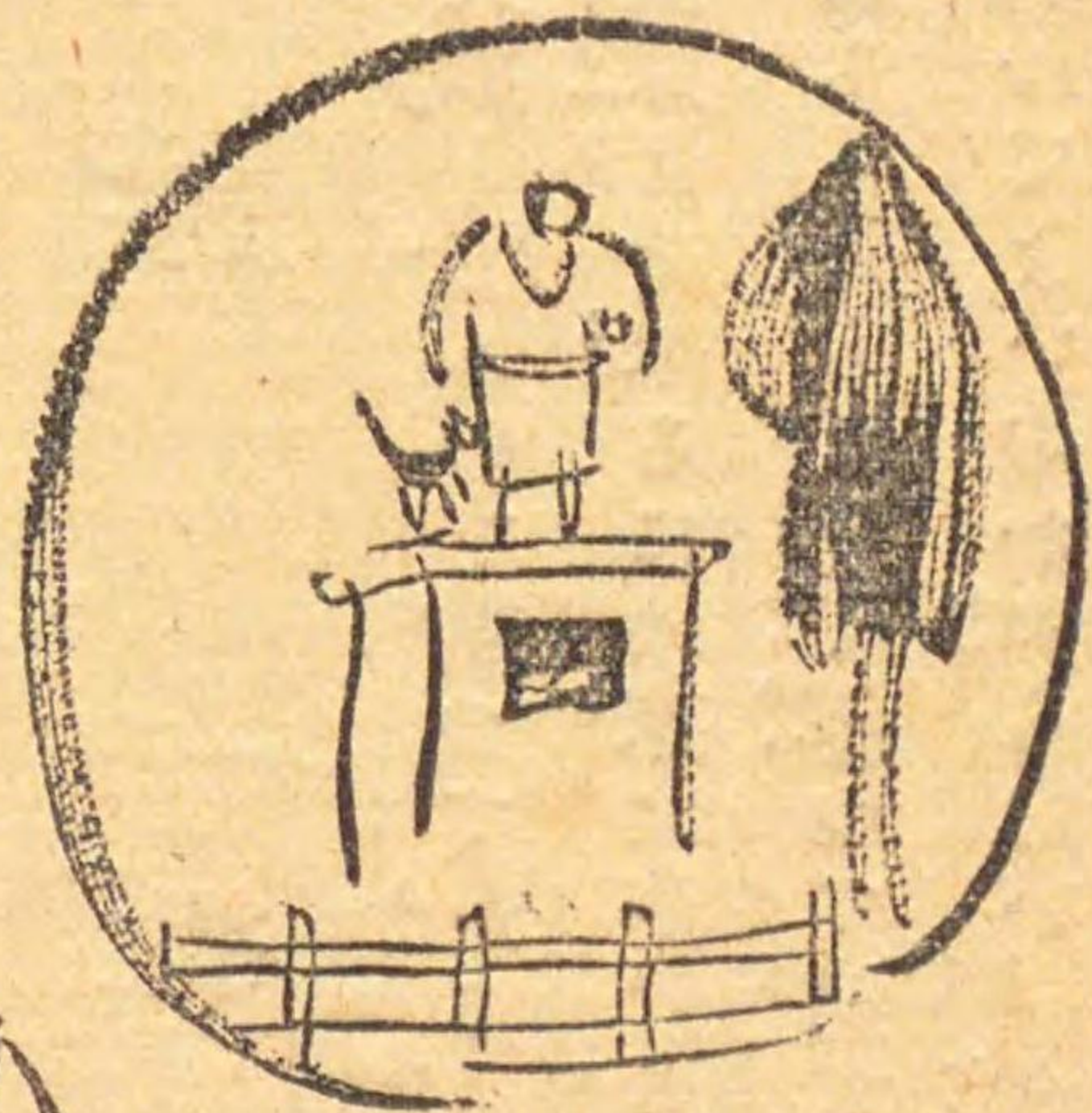
「左様なら。」

秋子は此上もない元氣であつた。その元氣なのを見て老爺はあんなに可愛いお嬢さんを、何故ひどい目に會はすのだらうと、今の母さまを惡みました。その中に汽車が來て、秋子を乗せて東京へ連れて行きました。秋子は馴れない一人の旅ですから心細くなつて、汽車が停車場から離れて見えなくなつてしまふと、泣きたいやうな、情ない淋しい心になつてしまつた。

(7) 誘拐

汽車の中では一人旅と言ふので乗つて居る人から、何處へ行くのだと訊かれて、お菓子やらお辨當やらを貰つて東京まで來るには來たが、田舎の停車場と違つて廣々として多勢の人ががやがやして居るので、あちらこちらを振り返つて見て居る内にいつか連れて來てもらつた人にはぐれてしまつた。何處へ行つてよいのか判らない。人に尋ねやうと思つても知つて居る人は居ず、知ら

ない人に訊くのは
訊悪くて足に委せ
て歩いて来ると、
上野公園まで来て
しまった。その中
にだんぐお腹は
空て来ましたたが、
何處へ行つて物を買つてよいのか、そ
れさへ判らないので、西郷の銅像の前
の石に腰掛けてボンヤリとして考へこんで居ました。聞いて
居たとは何も彼も違つて居るのみか、廣いので何處に姉さん
の家があるのか判らず、何處へ行つて可いのかそれさへ判ら
ず、又上野公園の中をブラ／＼と歩きまはりました。すると後から自分と呼ぶ人があるので、誰



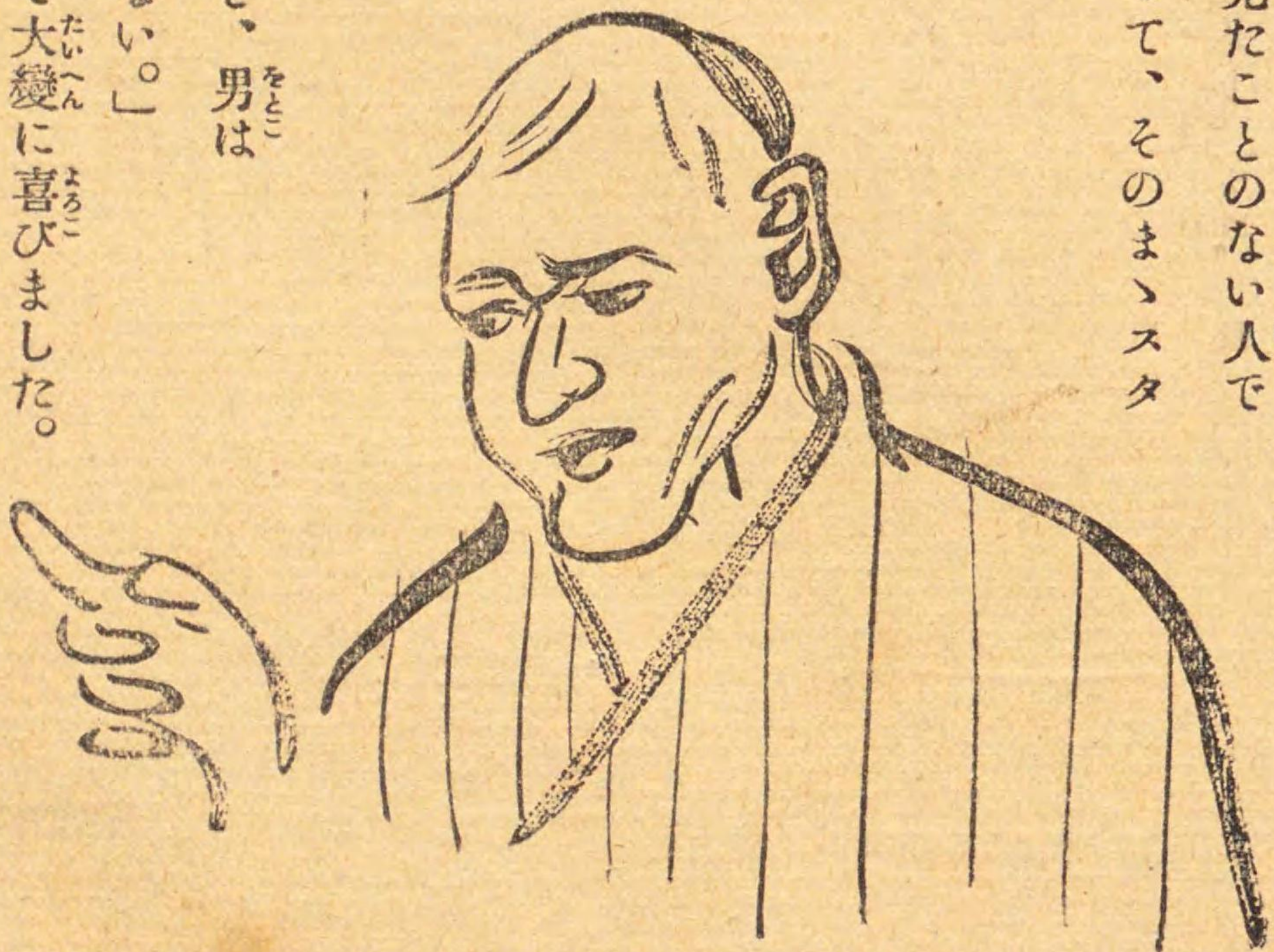
×
ないのです。何うしたものかと流石に勝氣な
秋子も弱つてしまつて、キヨロ／＼と見て居り
ました。

こんなこと
なら姉さんに
手紙でも出し
て停車場まで
来て貰ふので
あつたがと思
つたが、今更
にそんなこと
は役にはたゝ
誰

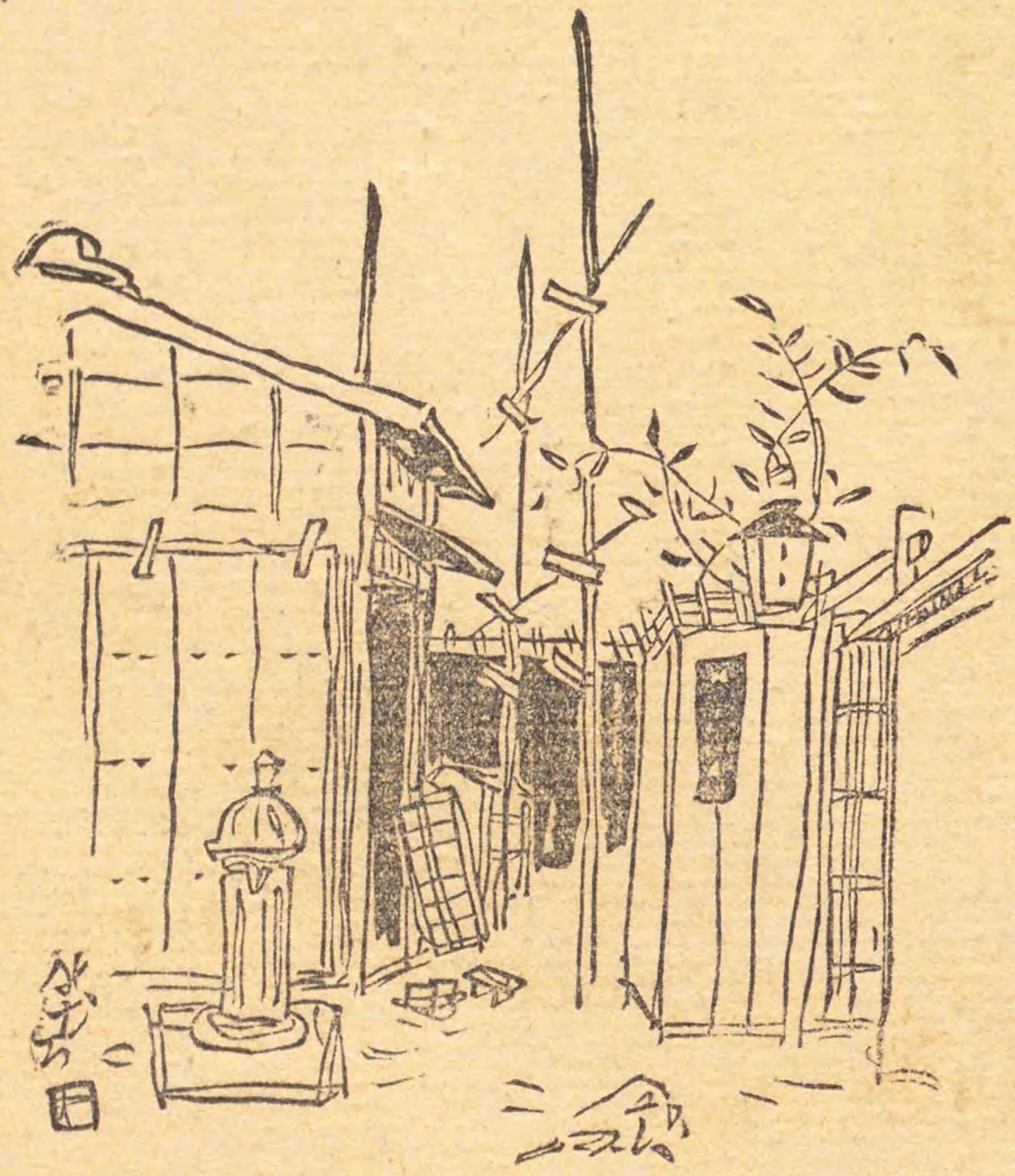
だらうと思つて振返つて見るとその人は今迄一度も見たことのない人で
ありました。自分と呼んで居るのぢやあるまいと思つて、そのまゝスタ
／＼と行き掛けると、その男は秋子の側へ来て、
「お前さんは一人かい。」
「はい、一人。」と何だか怖しい氣がしたので黙つて
しまった。

「何處へ行くのだい。」
「姉さんの所へ行くの。」
「姉さんの所と言ふのは何處か判つてゐるのかい。」
と親切らしく訊ねた。

秋子はそこで姉さんから来た葉書を出して見せると、男は
「私が連れて行つて上げやう、何も心配することはない。」
秋子はこの男が悪漢とは知らう筈はありませんので大變に喜びました。

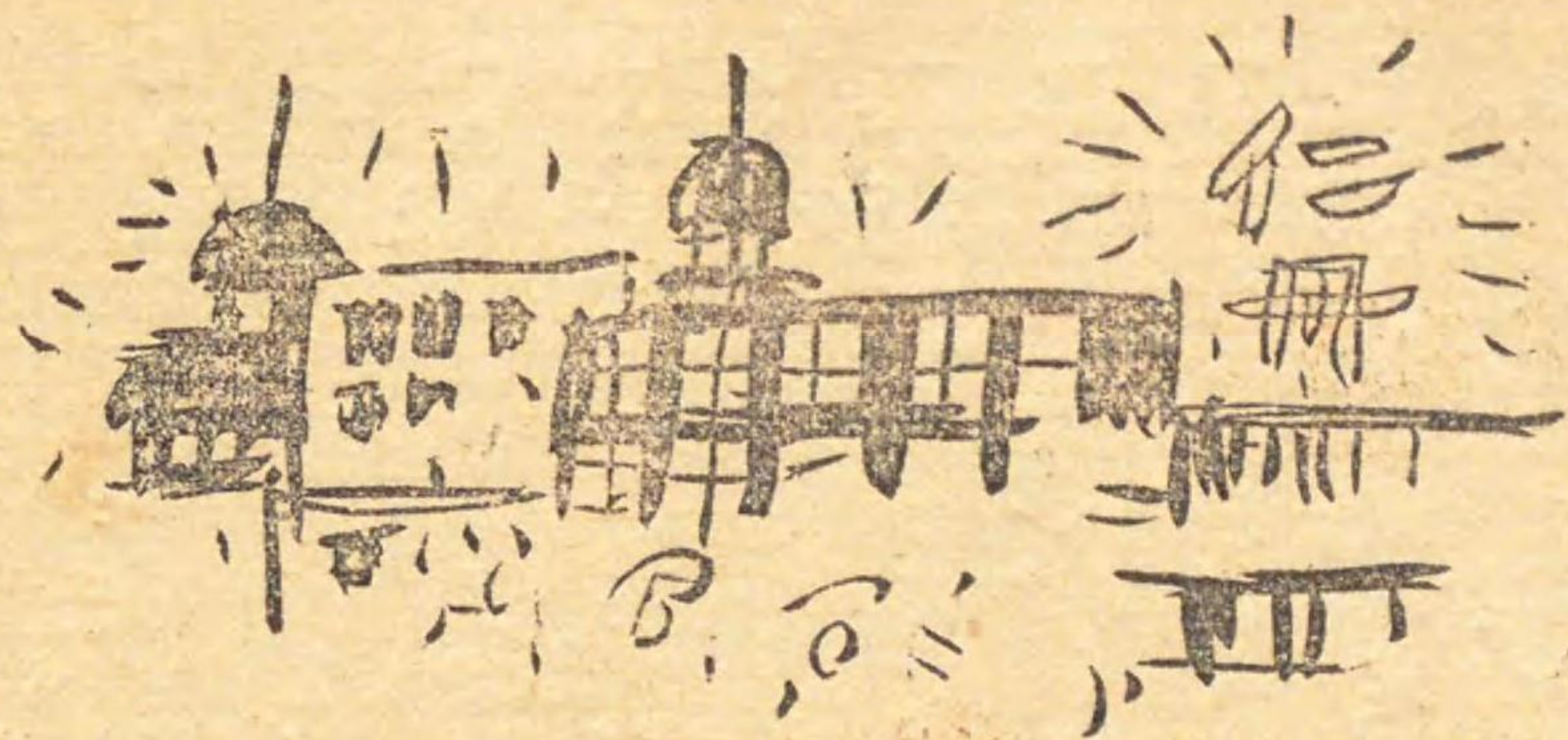


「こんなところに姉さんは居るの。」
 「うるさい娘だなお前の姉さんは此處に居るのだよ、さうやかましく聞くものぢやない、お前もくたびれたから早くお寝み。」
 「姉さんに會つて×」

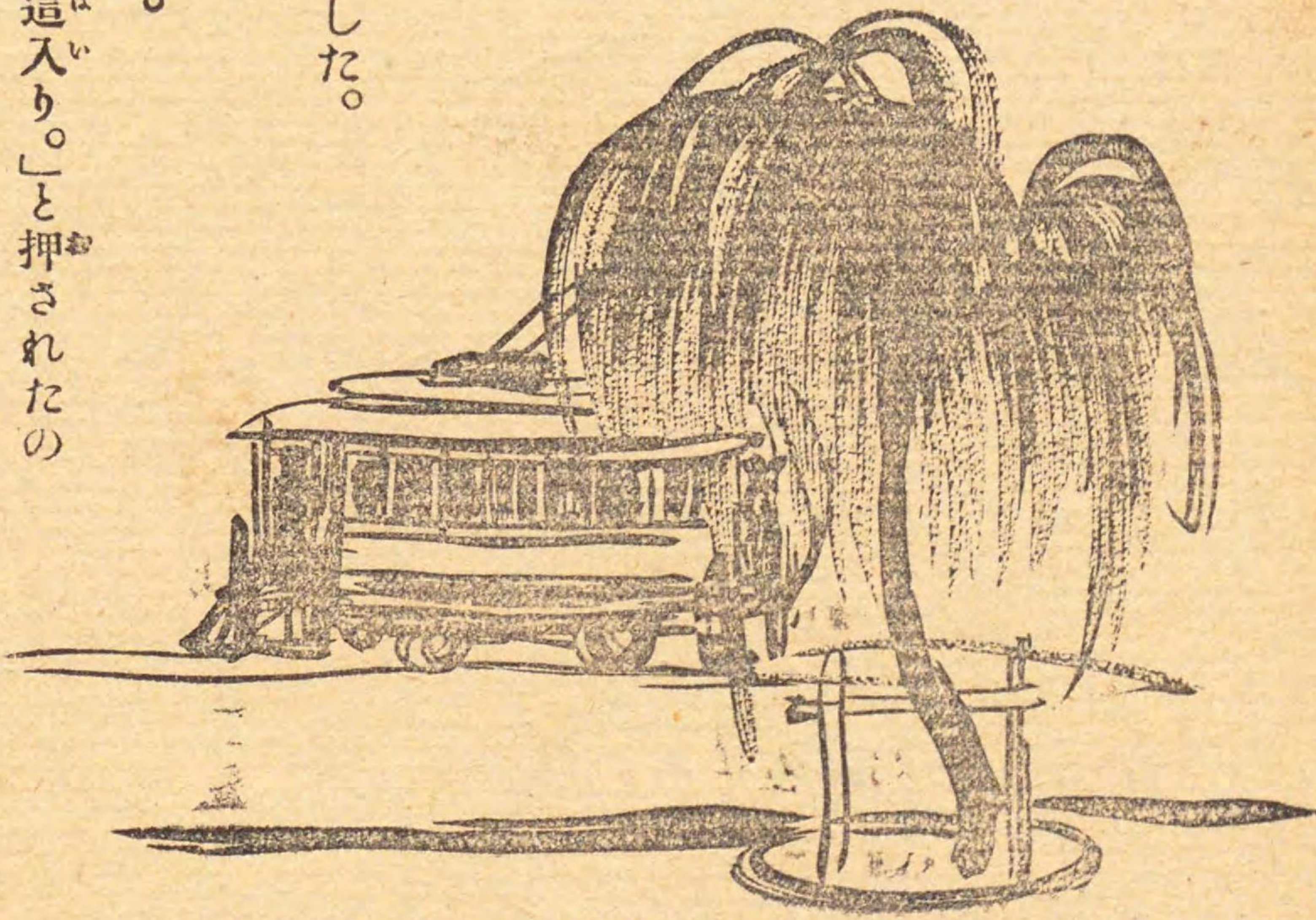


「勝手にするが可い、今日はな姉さんのかへりは遅いのだよ、何か外に用事があると言つて居たから夜お前が寝てからでなくてはかへらない。」
 「姉さんは何處かへ行つたの。」
 「あゝ、うるさい×から寝るわ。」

で、秋子は姉さんに會へるだらうと思つて這入ると、汚い家なので家の姉さんはこんなに汚い家に居るのかしらと思つて、



悪漢は尙も親切さうに色々感さめて呉れるので此人に付いて行けば姉さんに會へるものと思ひ込んで、喜んでその男の行く後について行くことにしました。三橋の所で電車に乗つたが、それから何處へ来たのか判らず下りると言ふので下りると男は狭い露路を彼方此方と曲つて低い家の前へ來ました。
 「姉さんはここに居るの。」
 と秋子は不審さうに訊いた。
 「此所に居るのだよ、さアお這入り。」と押されたの



な。お使ひに行つたのだ。」

「それちや私起きて待つて居るわ。」

「勝手にするが、お前お腹が空いたらう、御飯でも喰べたら何うだ。」

秋子は先刻から姉さんに會へると言ふのでお腹の空いたのも、夢中になつて忘れて居たが、今御飯を喰べないかと勧められると、急にお腹の空いたのが判つて、早速に喰べた。御飯を喰べると先刻からの草疲が出て、姉さんに會へると言ふので安心した故か、そのまゝそこへスヤ／＼と他愛もなく寝てしまひました。この様子を見てその男は笑つて、

「とう／＼寝てしまつた。」

と獨語を言ひながら秋子を別の室へ連れて行つて寝かした。

(8) 子守奉公

明くる朝、秋子は起きて見ると、昨夜自分を連れて来てくれた親切な男は居ないので心細くなつて、戸外へ出やうとすると、

「戸外へ出たりしては不可ないよ。」

と叱り付ける聲がしたので、秋子はびつくりして振向くと、女の人が棒か何かを持つて自分を打たうとしてゐるので、秋子は愕いて、そのまゝそこへ立すくんでしまひました。

「お前は一足でも外へ出ては不可ないのだよ出たらこの棒で打たれると覺悟しなくちや不可ないよ。」

「伯母さん、姉さんには會へないの。」

「姉さんなんか知らないよ、お前はこゝへ何しに來たのだい。」

秋子は姉さんに會ひに來たのに不思議なことを聞く人だと思ひながら、

「私は姉さんに會ひに來たのよ、昨日の人が姉さんに會はしてやると言つたわ。」

「お前の姉さんかい、お前の姉さんなんか居ないよ、私が姉さんだよ。」

「伯母さんなんか私知らないわ、私の姉さんぢやないわ、伯母さん、早く私の姉さんに會はして下さいな。」

「會はして上げるよ、だけど今こゝには居ないのだから最う二三日ばかりまつておいで、姉さん

の所へ連れて行つて上げるから、お前の姉さんは今他所へ行つてゐるから、そこへ連れて行つて上げるよ。」

「此所には居ないの？」

「居ないのだとも、昨日の人はお前に何か嘘を言つたのだよ、今度來たら嘘突きだと言つておやり、きつと困るよ。」

と何も知らない秋子にうまいことを言つて欺して了ひました。未だ何も知らない秋子は姉さんに會へると言ふので、二三日位まつのは平氣におもつてゐました。この伯母さんが姉さんに會はしてくれるのだと思ふと、嬉しくなつて、その日からは伯母さんの命付けをよく守つて、朝はお掃除をしたり、お庭を掃いたりしてをりました、それも皆姉さんに會ひたいばかりに、幼いながらも一生懸命になつて勤めて居たのでありました。二日三日はすぐたつて了まつたが、伯母さんは姉さんの所へ連れて行つてはくれない。何うかしたのだと思ひながらも、姉さんに會ひたいので、ある日聞いてみました。

「未だ連れて行つてはくれないの。」

「昨日ね、私が姉さんの所へ行つたのだよ、するとね病氣で寝て居たのだよ。二三日の中には姉さんの方から來るつて、お前の來たのを聞いて大變に喜んでね、直ぐにも來たいと言つてゐたが病氣で寝て居るものだから、來られないので大變に殘念がつてゐたよ。」

「姉さんは何處か悪いの。」と心配さうに聞きました。

「大したことはないのだよ、だからそんなに心配しなくても可い、その内には姉さんが來るからまつてゐるさ。」

秋子はまたうまく欺まされてしまつた。秋子は二三日をどの位にたのしみにして居たか知れなかつた。すると三日目になるとその伯母さんが秋子を呼んで、

「姉さんからのお話だね、お前子守に行かないかえ。」

「姉さんに會つてからなら行きますわ。」

「子守に行けば姉さんに會へるのだよ、だから子守にお出な。」

「姉さんに會つてからなら。」

と秋子はたゞ姉さんに會ひたいとばかり言つて居た。

「お前は何故さう頑固なのだらうね、子守に行けば姉さんに會へるのだからと言つてゐるぢやないか。」

秋子はそれを聞いて行き度くなつた。

「行つたら姉さんに會へるのでせうね、ほんたうでせうね。」

「ほんたうとも伯母さんは嘘をつくのは大嫌ひだから、ちや子守に行くね。」

秋子は行くと返事をした。子守にやられると言つて何處へやられるのであらうか、果して姉さんに會はしてくれるのであらうか、秋子は會ふつもりで行つても、姉さんが行つた家に居なくては會ふことは出来ず、どうしてこの人は姉さんに會はしてくれるのだらう、こんなことを言つて秋子をだまして了ふのかも知れない。それにしても東京に居る姉さんは何も未だ知らないのですか、西東も分らぬ不幸な秋子の行末はどうなつて行くことであらう、このまゝに姉さんには會はずにしまふかも知れない。そうするとあまりに可哀相ではありませんか、家に居る時から難儀ばかりして居て、今は姉さんに會ひたいと思つて東京へ來ると、又こんな難儀をする、何處まで秋子は苦しまなくては姉さんには會へないのでありませう、こんなにまで不幸な人はあるま

いとおもひます。秋子の行く先に果して姉さんが居るか何うか、疑がはしいのであります。

(9) 重 い 病

秋子はとうとう欺されて子守にやられた。行つた先には姉さんが居やう筈はありません。それで秋子は歸りたいとおもつたが何方へ行つてよいか判らないので、いやでいやで仕方がないが子守をしてゐました。ある日お使ひに行つてくれと言ふので秋子は外へ出ました。行ども、教へられた家が分らない。餘程來た時分に尋ねあぐんで家へ戻らうとしたが、同じ様な道が幾つもあるから其家へも歸りたくない、今は途方に暮れて仕舞つて只だ目的もなく足に委せて歩き出した何處まで行つても同じ様な道ばかりなので、途中で親切らしい伯母さんに聞きましたが、姉さんの住所を書いたものを忘れて來たので判らない、悲しくなつて秋子は泣き出しました。するとその伯母さんは、

「お前さんは一人で東京へ來たのかい。」

「え、一人で姉さんに會ひたくて来たのですけどね、姉さんの所が判らないものだから、樹の澤山にある所に居ると他所の伯父さんが来てくれて私を連れて行って姉さんに會はしてくれと言つたが、會はしてはくれないの、その伯母さんが子守奉公をすれば會はしてやると言つたので来たのですけど、矢張り姉さんは居ないの、私困つてしまつてそれで何處へ行つたら姉さんに會へるかと思つてゐるの、伯母さん、姉さんの居る所は知れないでせうか。」

「その姉さんの名は何と言ふの。」

「石井千枝子と言ふの。」

「あのね、學校へ行つて勉強してゐるの。」

「さうかい、それは困つたらうね、他所へ行く所もないのだね、伯母さんの家へ来ないかい、伯母さんが姉さんに會はして上げるから。」

「嘘ぢやないでせうね。」

「嘘は言はないよ、さア一緒に入来つしやい。」

と親切に言つてくれるので、秋子は喜んで連れられて行つた。その伯母さんの家は前の伯母さんの家より何十倍も大きい家で、秋子はキョロキョロと見て居た。家の者は見慣れない女の子が付いて来たので、乞食かと思つて追拂はうとしたので大變に叱られた。

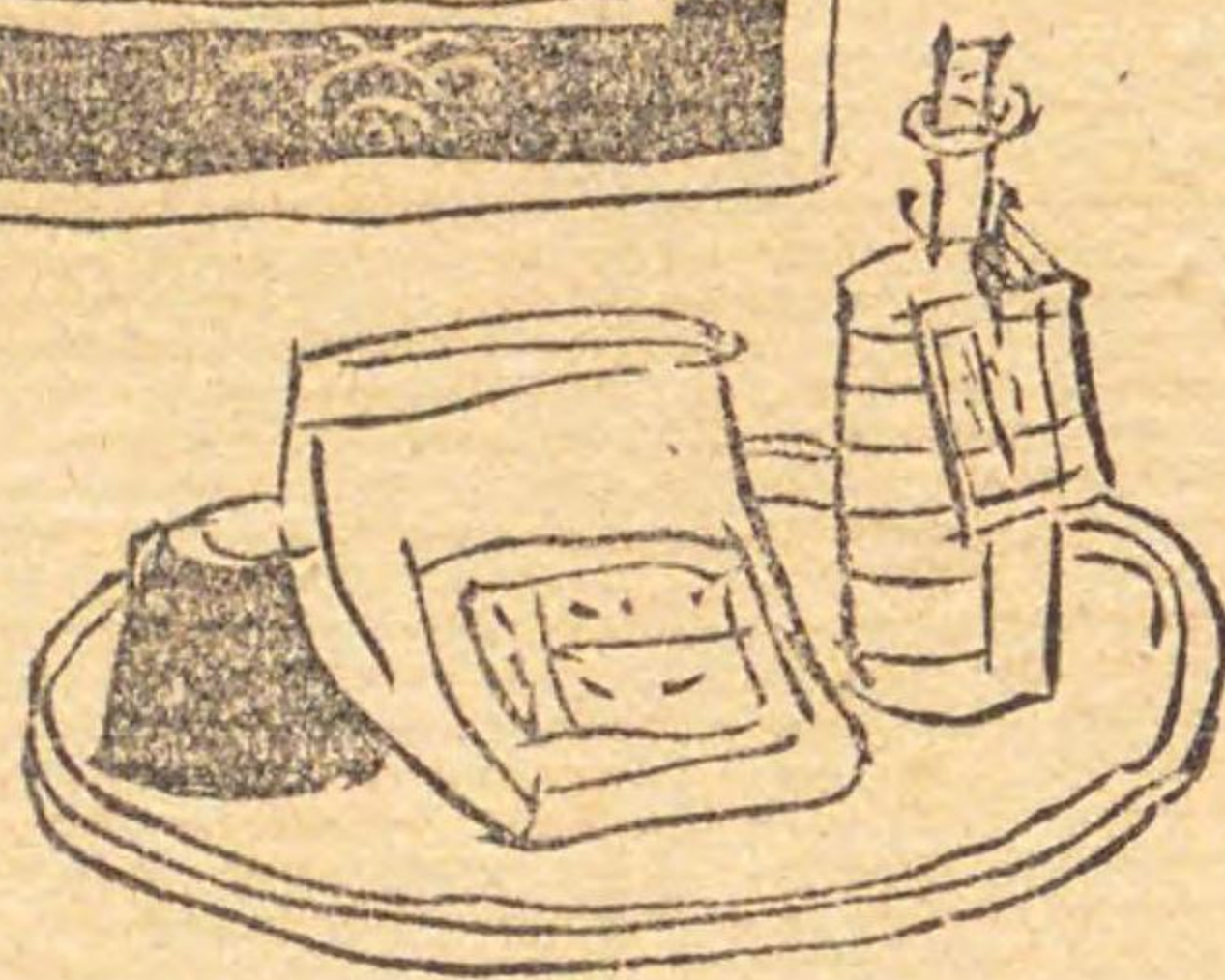
秋子は四五日来は

姉さん、姉さんど

世やルルッで

ろ／＼な心配やら、何やらで精神は疲れて来るし、體も大分つかれて来たので、その翌くる日から急に大熱が出て身動きも出来ない身の上になつてしまつた。

になつて何も知らない秋子は、自分の家に居る氣になつてた。もう、「姉さん、姉さん。」と夢中になつて呼んでゐるのであつた。



おんであつた

×のであります。それを見ると昨日秋子連れて来て下さつた奥様は大變に心配して醫者を呼んだり、看護婦を呼んだりして大騒ぎでした。病氣

早くその姉様に會はしてやりたいのは山々であつたが、捜す的もないので奥様は方々に問合せたが判らない、その中に秋子の方は段々に悪くなつて行くばかりで、誰の眼にもよくなつて行くとは見えません。看護婦も秋子が夢中になつて、熱に浮かされながら、

「姉さん、姉さん。」

と呼ぶ聲を聞くと遂に貫泣をする。たい秋子の望みは姉さんに一目でも會ひたいのが何よりの望みであつて、それさへ叶へばよいのであるが、それが叶はないのだから傷しいのである。

今日は少し加減もよいと言ふので奥様は秋子の枕許に行つて、

「少しはい、かい。」とやさしく訊きました。

「え、。」と淋しくニッコリとして「何だか私死にさうでなりませんわ。」

「そんなことを言ふものぢやない、何かほしいものはないかい。」

「私、何にも喰べたくないわ、姉さんにはまだ會へないのでせうか。」

「今ね、皆して捜して居るのよ。だからその中には屹度姉さんに會へるから心配なんかしてはいけないよ。安心してね早く直らなくては駄目だよ、秋ちやんが病氣だと聞くと姉さんはきつとび

つくりなさるから早くよくなつて、姉さんに丈夫な顔を見せなくてはいけないよ、屹度姉さんには會はして上げるから心配しないでね。」

「え、伯母さんほん

たうに濟みません。」

と氣のよはくなつて

ゐる秋子は斯う言つて

シク〜と泣き出した

「秋ちやん、何が悲し

くて泣くの、泣いたり

すると體にさはります

からね、泣かないやう

になさいよ。一日だつ×

様が行つてしまふと元氣がなくなつてしまつて、ボンヤリと天井を見詰めて居てはシク〜と泣



×て早く丈夫になつて居

なくて姉さんが來た

つて會はれないでせう

だからもつと元氣を出

して、歌でもうたふや

うにならなくてはいい

ないよ。」

いろ〜と親切に言

つてくれるので、いく

らか元氣は出たが、奥

くのであつた。誰も知らない家で病氣になつて寝てゐるのですから心細くなつて泣くのも最もです。姉さんでも居れば何の位にいゝか判りませんが、その姉さんの在所がまだ判らない、秋子がどんなに慕つて居ても仕方がない。姉さんにあはずに秋子は死ぬのだらうか、さうとするとほんたうに可憐さうな娘だ。

(10) 母の悔悟

秋子の病氣はよくないと言ふので病院へ入れられることになつた。毎日姉さんは未だなのと訊くのであつたが、どうにも仕方がないのでその内に、その内にと病人に安心させながら奥様は一生懸命になつて捜したがさつぱりと判らない。
 姉さんの千枝子は久しい間妹からの便りもないのと、家からも何とも言つて來ないので何うしたのであらうと心配してゐる矢先、母さんがある朝突然に千枝子の所へ來て、
 「お前さんの所へ秋子さんが來はしないかい。」
 と藪から棒の言ひ様であつた。

千枝子は何だか判らないので、
 「秋子さんが東京へ來たの。」
 飽くまで千枝子を疑つて居る母さんは、きつと秋子を隠したのであらうとおもつて、
 「お前さん、隠すと承知しないよ、秋子さんはお前の所へ來ると言つて



家を飛出したのだよ、だからお前の所より外には來る所はない、こゝに居るだらうね。」
 千枝子は母さんから此の話を聞いて吃驚して、
 「秋子さんが家出したのですか、家出を。」
 「さうだよ、あんなに幼くても油断

がならないよ、誰かい逃がしてやつたらしいのさ、よく聞いて見るとね、老爺がね、お蔵から出して停車場まで送つて来たのですつて、馬鹿な老爺だね、だから老爺は………まあ、いゝよ、ほんたうに居ないのだね。」

「えゝ、嘘なんか言ひませんわ。」

千枝子は心配で堪らなくなる、秋子が姉さんの所へ行きたい、行きたいと言つて、逃げて行くかも知れないと言ふことを思出して、それではいよく逃げて出たが、私の家が判らないので、何處かをうろついて居るに違ひないと思出すと、思出す程秋子が可哀相になつて来て、今頃はどんなに苦勞して居るだらうと考へて来ると、哀れになつて来て自然に涙が出て来た。

母さんは千枝子の様子が、何うも一向に知つて居るとは見えないので、少しガツカリすると同時に心配になつて来た。あの子が出家をするやうになつたのも、自分があまり酷くしたので、居耐られなくて家出をしたのに違ひない、本當に濟まないと思出すと、今迄に辛い目に會はしたことが秋子を出させることになつたので、世間でもどのやうに私を悪く言ふかも知れないと思ふと、何うしても秋子を捜してあやまらねばなるまいと思ふのであつた。

「千枝子さん、私はほんたうにお前さん達に濟まないことをしました。これまでのことは許してくれませんか、ほんたうに私が悪かつたのだから。秋子さんは是非とも捜し出してお詫をしたいと思つてゐるんですから。秋子さんが出て行くやうになつたのも、皆私が悪いからで、私さへ秋子さんを大事にすればこんなことはなかつたのです、今更言つたつて仕方がないが、これからは屹度秋子さんを大事にして上げますからね。」

千枝子はその話を聞いて大層に喜んだが、當人の秋子が居ないと言ふことは何よりも悲しい、痛ましいことでもあります。何處と言つて捜す的はないので二人は困まつてしまつて、警察へでも訴へて捜して貰ふより外には仕方がない。廣い東京の事だから自分達が一年かゝつたつて判らないかも知れない。母さんは一年でも、二年でも秋子が判るまでは東京に居る決心をした。

千枝子は秋子が最う居ないとなると、止度もなく悲しくなつて、何うしてよいのか判らずボンヤリとしてしまつた。

「母さん、秋子さんは何うしたのでせうね。」

母さんも心配になつて先刻から考へて居たが、秋子が大變に苦勞して居るやうに思はれてなら

ないので、

「ほんたうに秋子さん
は何うしたのでせう、
それを思ふと私しはど
の位に秋子さんに謝ら
なければならぬか知
れないのです、何も彼
も私が悪いのだから、
若しもこのまゝ判らず
しまつたら私は生きて
居る瀬はありません。」

と母さんは膝頭を見

たつて何うしたつて駄目とは知りながら、矢張り考へ出して来て、後から後からと悲しいことば



母さんは膝頭を見つめ

ホロ〜と涙を落して

ねりまじし花

× 詰めたまゝ、ホロ

〜と涙を落して
をりました。それ
を見ると千枝子さ
んも氣の毒になつ
て、もう少し前に
母さんが今の心に
なつたらこんなこ
とにはなるまいと
思ふのでありまし
た。それも此も今
は昔の事で、考へ

かりが思出となつて来る。あの時が最後であつたのかと、停車場での別れが夢のやうに浮んで來
る。秋子の泣いた顔がボンヤリと見える。姉の千枝子は耐まらなくなつて、

「母さん、何うしたら秋子さんに會へるでせうね。」

二人ともボンヤリとしてしまつて、どうしていゝのか判らないのであつた。途方に暮れて――
二人とも黙つたまゝ、色々心と心を砕いてゐる。千枝子は自分の妹が病氣で臥て居るとは少しも知ら
ない。又知れる筈はないのだ。若し神様が二人に秋子の病氣のことを知らしたらどのやうにおど
ろくことだらう。母と姉とが捜して居る行衛の判らないその娘は、今は病氣で重い枕について居る
とは誰が思ひませう。姉が捜してゐる妹は、囁言にも姉さん、姉さんと言つて居るとは誰が思ひ
ませう、姉さんは何うかして捜したいと思つても、今も云ふ通りすぐに知れるものではないので
困つて居るところへお友達の松村と言ふ方が訪ねて來た。この方から思掛けない便りがあらうと
は、まるで夢としか思へない、全く縁と言ふものは不思議なもので、何處で何うなつてゐるのか
判らないのであります。

(11)

囁

言

お友達の松村は仲のよい千枝子さんが顔色まで變へて大變に心配さうにして居るので、氣に懸りまして。

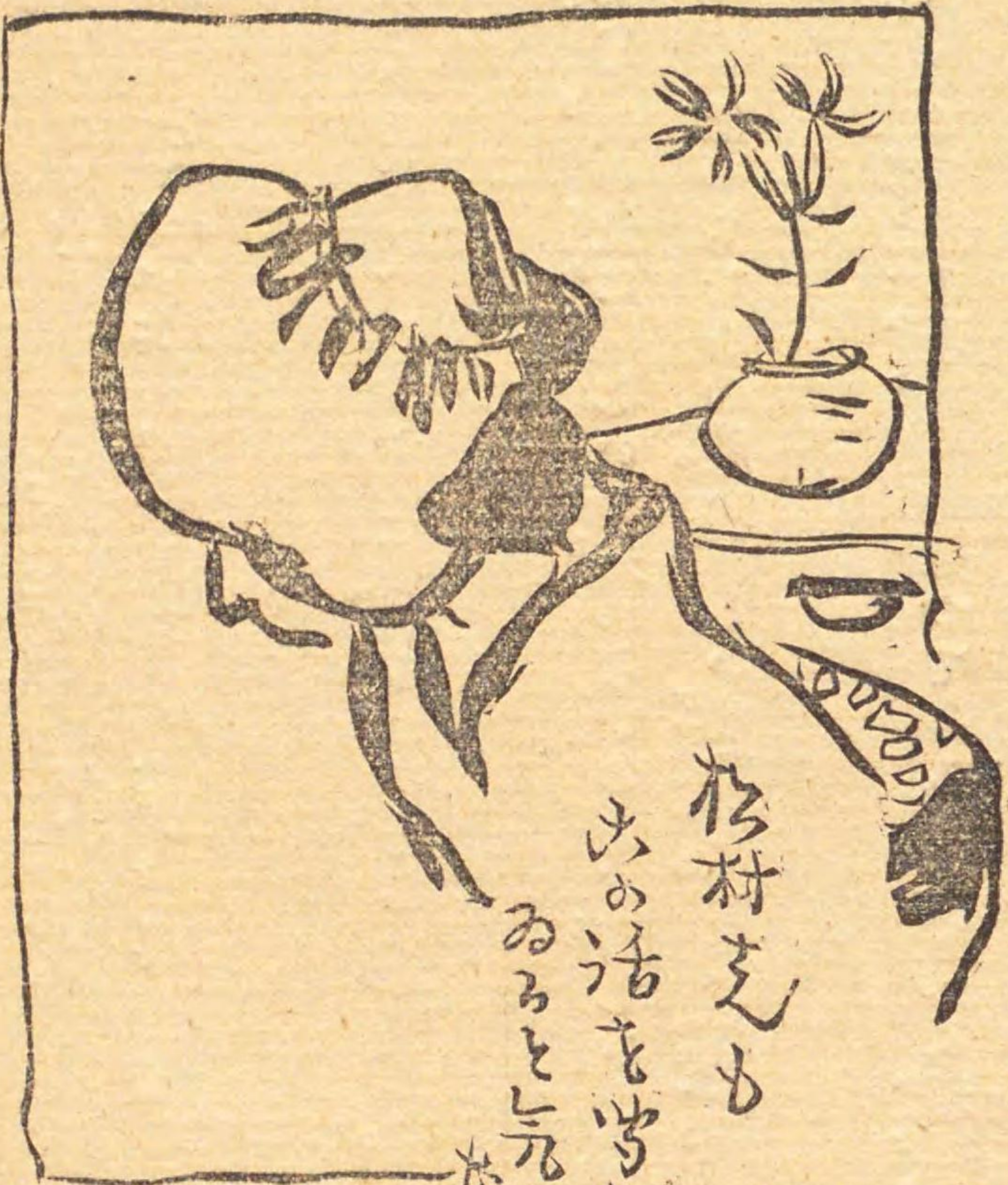
「何うかなすつたの。」とやさしく訊いた。

「いゝえ、何うもしないの、少し心配なことが出来てね。」

松村と言ふお友達は千枝子の室へ来て見ると見慣れない人が来てゐるので、誰かしらと思つて居ると、これが千枝子さんの母さんと判つて御挨拶をした。母さんはお友達が來たと言ふので邪魔をしては氣の毒だと思つて、少し歩いて來るからと言つて出て行きました。あとは仲のよいお友達同志ですから、千枝子は、

「貴娘にお話した私の妹の秋子がね……。」と言ふ中にも涙がこぼれるのでありました。その有様を見て、松村さんは驚いて妹さんが死んだのではあるまいかと思つて、何と千枝子さんが言ふだらうと片唾を飲んで話すのをまつてゐた。

「妹がね、私に會ひたいと言つて家出をしましたの、すると東京へ來たものか何うかそれが判らないの、多分東京へ來たのでせうが、何處に居るか判らないのよ、それでね母も大變に心配してしまつて、先刻まで私が悪いのだと言つて私にあやまるやら、秋子さんにすまないと言つて泣いてゐたのよ私もね、たつた一人の妹でせう、ですから若しものことがあつたとする×



松村さん

あの話を聞いて

あると元氣な毒で

からならぬ

と私困まるのよ

ねえ松村さん、

私そのことを思

出すと悲しくて

涙が出てならな

いのよ。」

松村さんもこ

のお話を聞いて

居ると氣の毒に

なつてならない

その時松村さんは不弗思出したのは先達病院へ行つた折に、何處かの奥様が心配さうに、看護

婦に石井千枝子とばかりでは判らないと心配さうに話して居るのを、廊下で擦違つた折にチラツと聞いたが、其時は別段氣にも留めなかつたが若しや妹さんが何かの縁で、あの病院で寝て居るのではあるまいか、若しさうだとすると此間の奥様が、看護婦に會つて聞いて見れば分らん事はあるまいと千枝子に話すと、千枝子は喜んでどうぞ今一度搜つて見てくれと松村さんに頼んだ。松村さんは、

「では看護婦に聞いてみませう、そうすれば判るわ、若しか行つて人違ひであつたりすると耻ですからね。」

「さうよ、それが妹だと何の位に嬉しいか知れないのよ、若しさうだとすると病院で寝てゐるのね、可哀想だわ、ひとりぼつちであの廣い淋しい病院に居て、私を呼んでゐるのよ、今行つて聞いてみませうかしら。」

「それよりかね、私はよく病院の看護婦を知つてゐるのですから看護婦に聞いて見ませう、さうであつてくれるとほんたうにいのね。」

「えゝ。」

と二人の心は同じ様に、夫が秋子で在つて欲しいと願つた。

松村さんはそれから直ぐと病院へ行つた。後に残つた千枝子さんは今に返事が来るか、来るかと待つてゐたが来ない、するとそれから一時間もたつと母さんが戻つて来たので、その事を話すと母さんは心配なのと喜びとで泣いたり喜んだりした。

「さうして見ると秋子さんは病院へ入つてゐるのね、一人でさぞ淋しいことだらうね。」

「急に悪くなつたのでせうよ、どんな病氣かしら。」

「あゝ若しものことがあつたら私はどうしませう、千枝子さん、私は若しも秋子さんが死ぬやうなことがあつたら、私は生きてはゐられないからね。」

「母さん、もう、そんな心細いことは言はないで下さい。未だ秋子か何うだか、其も判りはしないのに。」

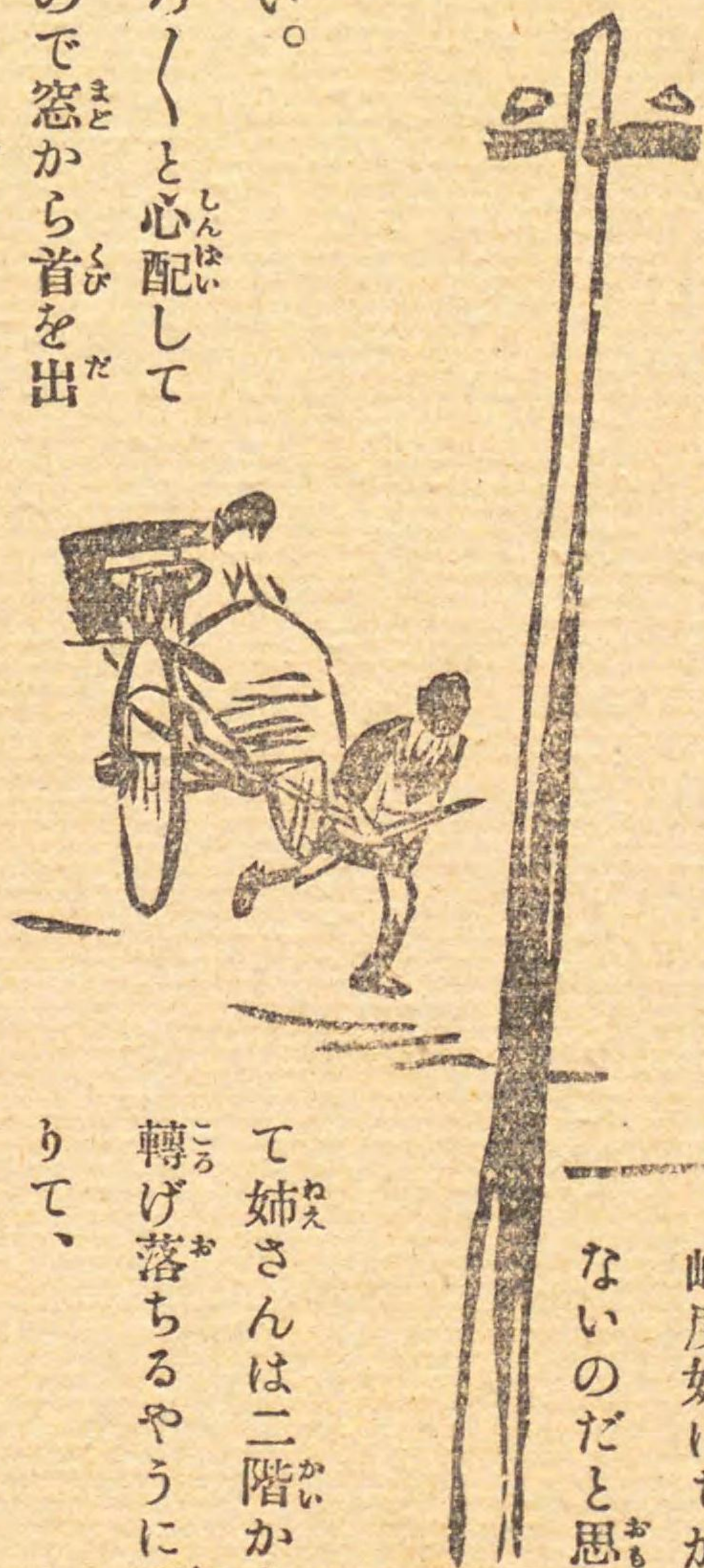
「どうも秋子らしい氣がするよ、きつとそれは秋子なのだよ、若し秋子でないとすると秋子はどこに居るのか判らないのだね、あゝ、母さんの胸は張切れさうだ、ほんたうに秋らやんにはすまない、どうしたらいいだらうね。」

「今に返事が来ますから、さうでしたらすぐ行きませう。」

二人は心配してゐた。妹が病氣になつて病院に臥て居るのかしら、何うして病氣になつたのかしら、きつと東京へ来ていろくな心配やら働いたりしたので病氣になんかなつたにちがひない若し死ぬと私は妹がなくなつてしまふのだ、天にも地にもたつた一人の妹がなくなつてしまふのだ、何うかしてそれが妹で、丈夫であつてほしい。

と姉さんの千枝子さんはいろく心配して居りますと、俵の音がしますので窓から首を出して見ると松村さんが俵でかへつて来たのです

「え、多分そうらしいの、だけど誰も知らないでせう、ですから一度病院へゐらつしやいな、向ふの奥様も病院に来て居てこのお話をしたの、すると大變に喜んで急いで来て下さいと言ふ



「分つたの。」

て姉さんは二階から
轉げ落ちるやうに下
りて、

屹度妹にちがひ
ないのだと思つ

となの、私にはよくは判らないけどどうも秋子さんらしいの、時々姉さん、姉さんと呼んでゐるのですもの、私ですもの、私……思はず泣いてしまつたわ。」

「まアそんなに呼んでゐるの。」千枝子も潤み聲になる。

「え、細い聲でね、夢中なんせう、姉さん、姉さんつて、それはかあいさうよ、あれが秋子さんと思ふとね、私俵の上で、泣いて了つたわ。」

「ほんたうにかあいさうね、そんなに私をしたつて居りながら病氣になつてしまふのですもの。」三人は急いで行くことになつた。俵を呼んでもらつて病院までいそがした。途中、姉さんは秋子さんのことが心配になつて、どうしたらいいだらうと其のことばかり思ひ悩んでゐたのであつた。

俵は一刻一刻に病院へと向つて行く、秋子は何と思つてゐるのであらう。

(12) あゝ姉さん

秋子はフト眼が醒めると看護婦が来て、

「お薬を飲みませんか。」
 「私飲みたくはないわ、姉さんは未だなの。」
 「お姉さんですか、今にのらつしやいますよ。」
 「さう、もう、今に、今にといつてからいく日にもなるのね、私何うしても姉さんには會へないのでせうか。」

「そんなことはありませんよ、今にいらつしやいますよ。」

秋子は一度は起きたが又グタリと横になつて、天井を見詰めたまゝホロ／＼と涙をこぼしてゐるのであつた。そのありさまを見て看護婦までが思はず貰ひ泣きをしたのでした。

「私の姉さまね、そりやいゝ人よ、私をそりやかあいがつて下さるの。」

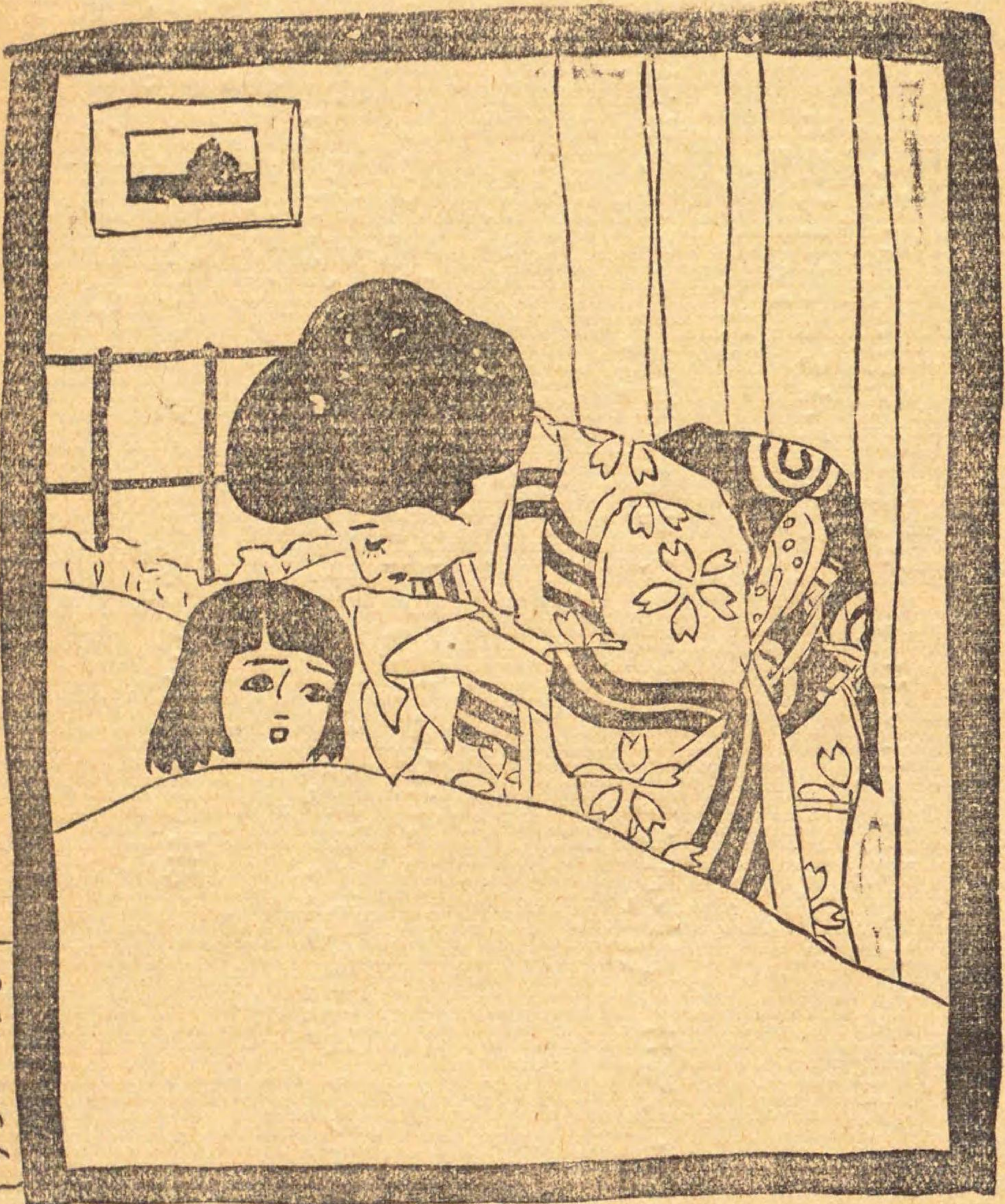
と言ふ所へ、ドヤ／＼と人の足音がするので、秋子はすぐ耳を立て、

「あゝ、姉さまよ、あの足音は姉さまの足音なのだよ。」

とツツと聞いてゐたが、その足音が自分の室の前へ來るとピッタリと止まつてしまつた。

「姉さまがのらしやつたのよ、早く呼んで下さいな。」

看護婦はまさかと思つて戸を開けると見知らない女の人が、奥様に連れられて入つて來るの
 で、お見舞に來たのであらうと思つた。
 入つて來る人を見てゐた秋子は、千枝子



めぐりあひ

さんの姿が眼に入ると、
 「姉さん、私よ、姉さん。」
 と夢中になつて呼びました。千枝子はよく見ると病氣で瘦せてこそ居るが、自分の妹にちがひがないのでいきなり寢臺

の側へ行つて、

「あゝ、秋子さんだつたのね。」

と瘦せた秋子の手を握つたまゝハラ／＼と涙をこぼしました。

「姉さん、私——會ひたかつてよ。」

と秋子は千枝子の膝に縋付いたまゝ泣き伏した。そこに居る人達は二人のありさまを見て誰も彼も貰ひ泣きをしました。中でも母さんは秋子の側へよつて、

「母さんが悪るかつたのだから勘忍して下さい。」

と言つてあやまりました。

秋子は母さんも来たのだから、又連れてかへられるかと思つて心配したが、こんどはやさしく言つてくれたので、安心しました。

「秋子さん、姉さんに會つて嬉しいでせう。」

「えゝ、私こんな嬉しいことはないわ、姉さん、こゝに居て下さいね、私ひとりで淋しくて仕方がないのですもの。」

「えゝ、居て上げますよ、秋子さんがよくなるまでは居ますから心配しないで、早くよくならなくてはいけませんわ。」

「えゝ、姉さんに會へたのだから、私、もうすぐによくなるわ。」

秋子のうれしさうな顔と言つたらありませんでした。

母さんはそこでいろ／＼と奥様に厄介になつたお禮を言つて、自分の悪いことをいろいろと秋子の前でわびました。奥様はかうして秋子の姉さんも判つて見ると、中々立派な人達ですから、秋子が丈夫になつたら自分の娘にしたいと言ふことで、秋子も姉さんも喜んで承知しました。秋子の父さんもこのことを聞いて大變に喜びました。それから秋子の病氣は日増しによくなつて行くばかりで、間もなく退院しまして親切な奥様の家へ貰はれました。

めぐりあひ終

(次 目) 説 小 女 少 (堂 古 今)

- | | | | | | | | | | |
|--------|-------|-----|-----|-------|------|-----|----|-----|------|
| 第十 | 第九 | 第八 | 第七 | 第六 | 第五 | 第四 | 第三 | 第二 | 第一 |
| 母のおもかげ | まだ見ぬ親 | 捨小舟 | 磯千鳥 | めぐりあひ | はらから | うき草 | 良子 | 姉妹塚 | 別れし友 |

大正二年九月十日印刷
大正二年九月十五日發行

發行所
振替東京
四九〇七
今古堂書店
電話浪花四六五九

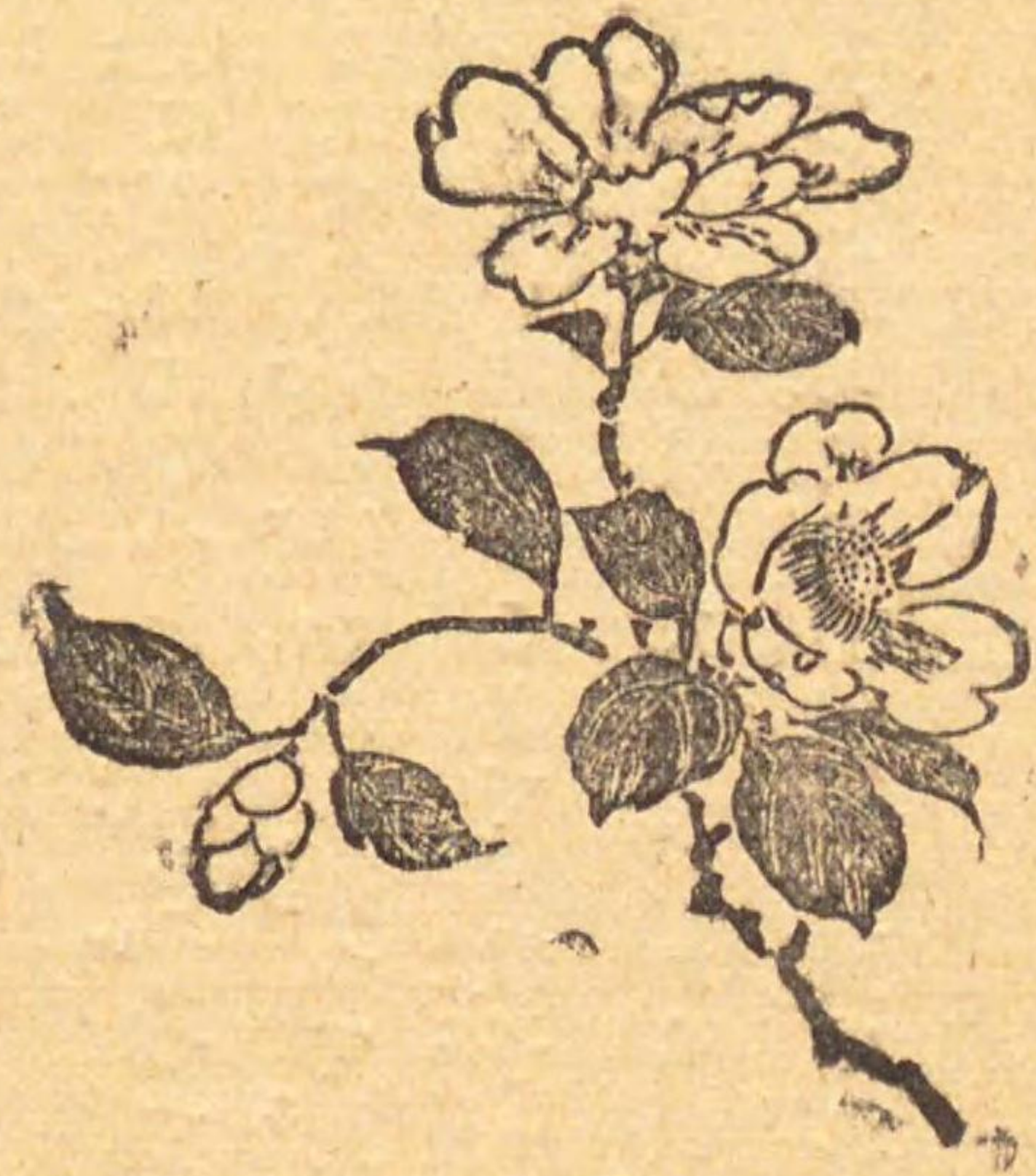
著作者 さゝふね
發行者 瀧川民治郎
印刷者 菅井十一郎
印刷所 東京市神田區松住町五番地 碓文舎

定價 五十錢

以上十篇は皆本書の姉妹篇で、何れも面白く悲しく而して爲になる物語であります、殊に本文中には新らしい挿畫が印刷してありますから對照して讀むと一層同情の念が起ります、少女諸君が家庭の讀み物として尤も適當な書と信じます、定價は一冊十五錢づゝ送料二錢づゝです

(挿畫は 綾 みる 舟)

(著者は さゝふね)



家庭新お伽噺

子供に及ぼす感化は、
 學校よりも家庭の方が
 重大であると聞きます。

家庭新お伽噺は、斯の
 要求に基て、出版され
 たもので、文章の平易
 と親切は、挿畫の美麗
 と相對して、他書に比
 類を見ないのでありま
 す、面白、可笑しく又
 憐れな物語の中に汲み
 切れの教育を含んで居
 る、理想的良書であり
 ます

山田鶴川作
 村田天籟作

宮野雲外畫
 鈴木綾舟畫

定價一冊七錢
 送料一冊貳錢

（五冊以上同時に御註
 文なれば送料不要）

發行所

電話浪花四千六百五十九番
 振替東京四千九百〇七番

今古堂書店

發行目録

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
俊	棄	不	不	梁	孝	日	壺	姥	三	紅	三	矢	八	梅
德	丸	如	如	川	子	高	坂	捨	三	皿	莊	口	百	若
丸	兒	歸	浪	庄	萬	川	萬	驗	間	缺	太	夫	屋	お
丸	兒	武	子	八	吉	川	記	山	堂	皿	夫	渡	七	丸
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
お	ま	皿	石	乃	明	お	孝	お	一	牡	孝	幡	鴛	鸞
い	て	屋	童	木	治	岩	女	玉	心	丹	女	隨	院	長
け	子	敷	丸	將	皇	荷	野	池	助	籠	冬	衛	塚	郎
45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
小	小	辻	み	母	鈴	越	想	玉	袖	花	有	ナ	お	孝
幡	さん	占	なし	木の	後	川	夫	川	賣	馬	レ	オ	菊	の
平	金	五	郎	子	情	水	吉	憐	芳	萩	娘	猫	ン	虫
次	郎	兵	衛	娘	い	び	染	誠	男	太	次	井	天	仲
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
母	お	漁	人	腹	油	重	友	橋	彌	國	宇	不	な	三
の	つ	師	さ	屋	の	の	の	の	次	定	都	孝	さ	勝
ゆ	ま	の	ら	か	お	井	子	別	英	喜	宮	の	の	半
く	八	郎	兵	衛	娘	い	び	染	誠	男	太	次	井	天
へ	衛	娘	い	び	染	誠	男	太	次	井	天	仲	七	七

